

42440

教科書文庫

4

810

42-1938

20000  
47514

S.13  
1938

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

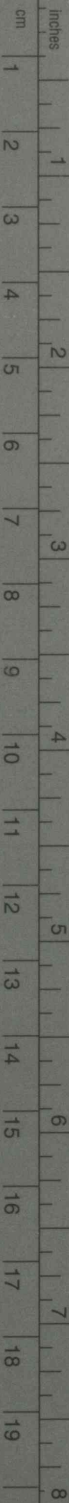


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
An4  
資料室

新制女子國語讀本

四年利用

卷一

新教授要目準據



資 料 室

日八十二月一年三十和昭  
濟定檢省部文  
用科語國 校學業實·校學女等高

375.9  
An 4

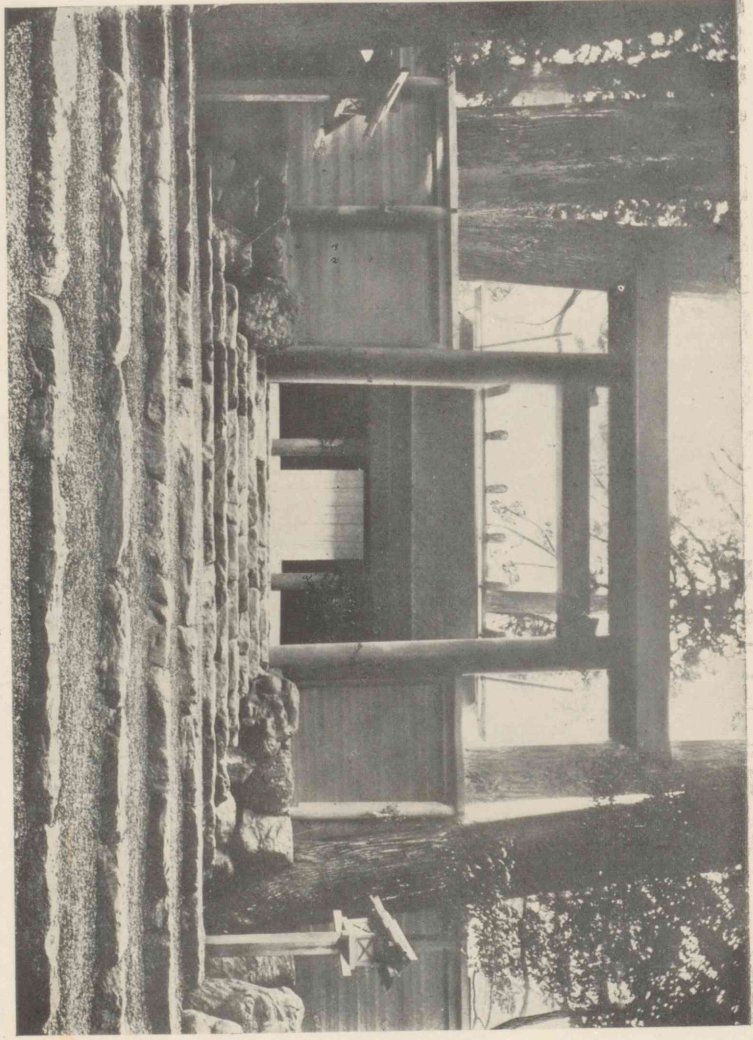
臺北帝國大學教授  
安藤正次  
學習院教授  
東條操  
共編

新制女子國語讀本 卷一

四年制用

新教授要目準據

東京 三省堂  
大阪



(照參觀二第)

宮 内

廣島大學圖書印

廣島大學  
教  
47514  
圖

東京  
三  
三

卷一 目次

一 日出づる國  
二 伊勢參宮  
三 比叡の鳥  
四 童謠五篇

一 一  
二 一  
三 一  
四 一  
五 一  
六 一  
七 一  
八 一  
九 一  
十 一  
十一 一  
十二 一  
十三 一  
十四 一  
十五 一  
十六 一  
十七 一  
十八 一  
十九 一  
二十 一  
二十一 一  
二十二 一  
二十三 一  
二十四 一  
二十五 一  
二十六 一  
二十七 一  
二十八 一  
二十九 一  
三十 一  
三十一 一  
三十二 一  
三十三 一  
三十四 一  
三十五 一  
三十六 一  
三十七 一  
三十八 一  
三十九 一  
四十 一  
四十一 一  
四十二 一  
四十三 一  
四十四 一  
四十五 一  
四十六 一  
四十七 一  
四十八 一  
四十九 一  
五十 一

目次

一

五	峠の茶屋	葛原 函	三
六	物賣の聲	夏目漱石	三
七	根の力	宮城道雄	三
八	狗ころろ	羽仁もと子	三
九	寢殿の雀	二葉亭四迷	四
一〇	奈良の初夏	湯淺常山	五
一一	天真爛漫	大類 伸	六
一二	幼き日	山脇房子	六
		中 勘助	七

一三	子供のため	島崎藤村	六
一四	七夕祭	吉田絃二郎	六
一五	蜀山人の盆燈籠	饗庭篁村	六
一六	神樂師の息子	坪内逍遙	七
一七	初秋日記	沼波 瓊音	七
一八	天杯御下賜	八波 則吉	七
一九	手紙の懐かしさ	前田 晁	七

- 二〇 忘れ得ぬ人々
- 二一 溪をおもふ
- 二二 日章旗
- 二三 うつくしい日本
- 二四 心に太陽を持って
- 一 唇に歌を持って
- 二 日本 人
- 二五 奥村五百子

- 國木田獨歩 一三
- 若山牧水 一五
- 木宮泰彦 一四
- 山村暮鳥 一五
- 山本有三 一五
- 堀内文次郎 一七

— 目次 終 —



松井簡治  
文學博士。國文學者。千葉縣の人。  
文久三年（一五三三）生。

出づる  
る。

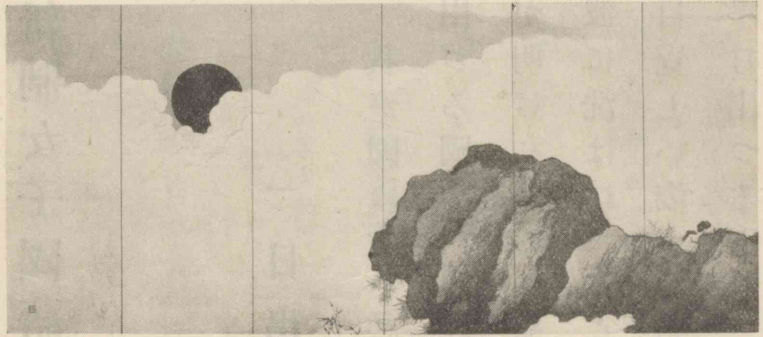
### 新制女子國語讀本 卷一

#### 一日出づる國

松井簡治

我が國は遠い昔から日出づる國と呼ばれてゐる。日出づる國！ 嗚呼、なんと美しい名ではないか。東の空が明け初めると、紫にまた紅に曙の雲がたなびき、靜かな波に洗はれてきらくと朝日が昇る。其の嚴かな、然も目覺しい姿が、我が國の名に呼ばれてゐるのである。嗚呼、日出づる國！ なんと勇ましい名ではないか。

思はせ



小室翠雲筆

日の出は、夜の暗黒を破る點から  
文明の魁を示し、燦爛として輝く光  
景から文化の全盛を思はせ、朝の第  
一の光であるといふ事實から前途  
の希望を語つてゐる。日出づる國  
の國民は、世界國民の先頭に立つて  
自ら先づ立派な國民となり、快活な  
心を以て自國の全盛を喜ぶと共に、  
益、其の發展に力を盡くし、また常に  
前途に希望を抱いて、元氣よく勉強  
を續けねばならぬ。

大正天皇

御名は嘉仁。大正  
十五年崩御、御年  
四十八。

年々に云々

大正五年の御製。

平野國臣

通稱は次郎。福岡  
藩士、幕末の志士。  
元治元年(一八六四)  
歿、年四十三(或  
は三十九ともい  
ふ)。

戴載

大正天皇が、

年々に我が日の本の榮行くも

いそしむ民のあればなりけり

と仰せられた御製、志士平野國臣が、

青雲のむかぶす極みすめるぎの

御稜威輝く御世になしてん

と詠んだ歌、いづれも日出づる國の國民にとつて、最も大

切な教訓である。

神武天皇以來二千五百九十餘年、連綿たる一系の皇室  
を戴いて、順序正しい進歩を續けて來た我が國は、世界現  
存の何れの國家に比べても最も古い歴史を有つてゐる。

大化  
孝徳天皇の御代  
の年號(二五十二  
三)

歴史は古い。併しながら、日出づる國の國民は常に若々しい心を有つてゐる。大化の改新も、明治の維新も、皆此の若々しい心から生まれたのである。日出づる國の國民は、常に此の若々しい心を以て、天壤と共に窮りのない國運の發展を期すべきである。殊に諸子の如き前途有爲の少國民が、此の心掛を以て、十分に身體を錬り、道德を磨き、知識を廣めて行つたならば、我が國家の前途は實に頼もしいものである。嗚呼、日出づる國！此の美しく勇ましい名は廣い世界にたゞ一つ。それは我が國にだけ附けられた名である。

錬練

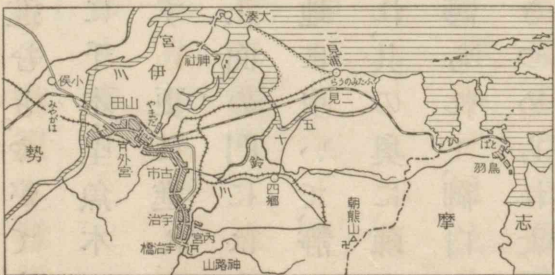
二 伊勢參宮

五十嵐力

五十嵐力  
文學博士。早稻田  
大學教授。國文學  
者。米澤市の人。  
明治七年生。

山田  
三重縣宇治山田  
市。

俄に參宮を思ひ立ち、昨夜八時に東京を立つて、今朝十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しき、殊に内宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく嗽いで、それから頭上の木の枝を透して空を仰ぎ、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔にさび



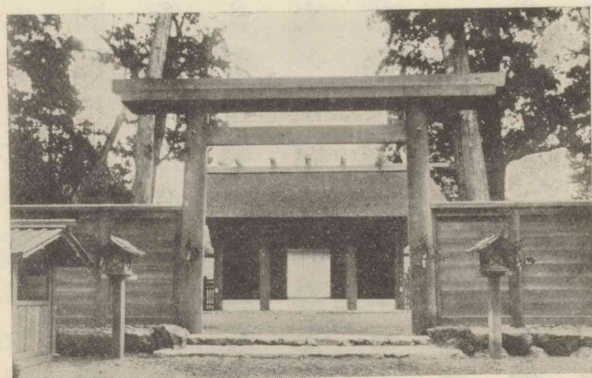


支へる  
柱のやう

千木・堅魚木



搖遙



た神杉の太い幹が天を支へる柱のやうに立並んで居る間を辿つて、暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで外塀の内に入ると、正面の門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、静かにそよ風に揺られ、其の奥に疎らに立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづお白幕の手前の石段の下に跪いて、小

婆姿  
繰繰

西行法師

俗名佐藤義清、後鳥羽上皇に仕へた北面の武士であつたが、後出家し西行と號した。建久元年(八五〇)歿、年七十三。  
忝なさに云々

「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ。」

御手洗川

神宮の社前を流れる川。五十鈴川をよぶ。

笙



篳篥



い祈を捧げました。そして傍に並んでゐた老婆や老爺が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰り返すのに聞き入りながら、現の間に西行法師が、忝なさに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。  
直き清き強き心をあらはして  
すく／＼立てりたふと神杉  
内宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。而して此の御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に現したもののやうに思はれます。  
御手洗川に嗽いで、折しも聞える笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、此の神境を辞しました。そして顧み顧

み宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ

赤福餅で腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩

境の名山朝熊山に走らせました。

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の

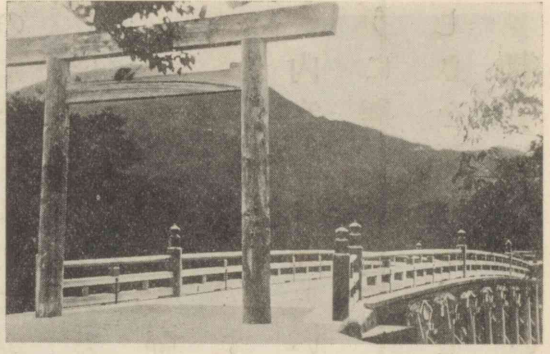
流に肥された田圃路を車に揺られ

ながら、私は此の神境が大神の大御

心に叶つた謂はれを考へました。

大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓・矢・靱の音聞かぬ國と、大神宮儀式帳に、



宇治橋と神路山

朝熊山

神宮の東方に聳え、海拔五四四米。

御裳濯川

五十鈴川をいふ。

大神宮儀式帳

二卷。延曆二十三年(西曆八〇四年)伊勢内外兩宮より朝廷に奉つた注進書。

靱



度會の國  
伊勢國(三重縣)度會郡の地域。

あらう。

わづらはす

率ゐ

意鎮ります國と、悦びたまひて、大宮定めまつりき。

とあるを見れば、第一には山水の景色の類なきを愛でさせられたのであらう。

第二には地勢・氣候・風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう。

第三には此の土地に永久なる平和の可能性のある事を愛でさせられたのであらう。

最後には一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的・光明的發展を見そなはずに都合のよい、氣の落ちつく境と思はせられたのであらう、などと考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じて居る中に、いつしか朝熊山の麓に着きました。

(我が書翰)

三 比叡の鳥

高濱 虚子

高濱虚子  
名は清。小説家。  
俳人。松山市の人。  
明治七年生。  
部屋  
比叡山の宿坊院。

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋に行つて見る。

朝日が部屋一面にさし込んで居る。湖水と思はれる邊は雲ばかりで、何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より稍高く、稍低く、無数の杉の梢が、銚のやうに突つ立つて居る。左手には、北谷の向ふに當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の

東谷  
比叡山延暦寺の境  
内の一部。

さうして  
霞—霧



比叡山より琵琶湖を望む

杜も、新鮮な色をして居る。さうして、その間を薄い霞が流れて居る。非常に静かだ。自分の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地をわが物顔に啼き囀つて居るのは、小鳥だ。何といふ可愛い聲であらう。名が分らぬのが残念だ。その杉の梢で、一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で、

聞え。

他の一羽が答へて居る。また遙か向ふの谷深く、他の一羽が應じて居る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。又その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凜々しいところがあつて、その音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名の分らぬのが残念だ。それも一羽ではない。三羽・四羽と聞くうちに、だん／＼殖えてくる。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸のやうに、互に錯綜して、能く調和を保つところが面白い。突然けん／＼とけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞

山鳥



いた雉子の聲よりも稍急調だ。或は山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、たゞ一聲で引裂いたのかと疑はれる。

暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸み込んでしまつて、そのあとは元の通り静かになる。眞先にその静けさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれた緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、又縦糸を織つて、前の小鳥が啼く。又横糸を織つて、次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待ち設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似



啄木鳥



漂うて

て居て、谷の神社の鯿口が口をあけて呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲々が皆高調で、晴れぐとした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう。」といひ、他の者は「山鳩だらう。」といった。琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うて居る。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だんぐと谷が深く見えて来る。

(叡山詣)

四童謠五篇

一めだか

白鳥省吾

白鳥省吾  
 詩人。宮城縣の人。  
 明治二十三年生。

めだかはそろつて泳いでた、

大きいめだか

小さいめだか。

木の芽 草の芽

萌え出した。

春が来たよと

すいすい泳ぐ、

大きいめだか

小さいめだか。

土橋の上を  
小馬もわたる、  
子供もわたる。

(日本童謠集)

二 鉛筆の心

西條八十

西條八十  
詩人。早稻田大學  
教授。東京市の人。  
明治二十五年生。

鉛筆の心  
ほそくなれ、  
削つて 削つて  
細くなれ。

三日月さまより

なほ細く、  
蘆の穂よりも  
なほ細く、  
燕の脚より  
なほ細く、  
ズボンの縞より  
なほ細く、

朝の雨より  
まだ細く、  
豌豆の蔓より  
まだ細く、  
蝨の鬣より

まだ細く、  
香爐の煙と  
消えるまで。

鉛筆の心  
ほそくなれ、  
削つて 削つて  
細くなれ。

三 アイヌの子

大豆島  
の  
露くさは

北原 白 秋

(西條八十童謡全集)

北原白秋  
名は隆吉。詩人。  
福岡縣の人。明治  
十八年生。

露に濡れ濡れ、  
かはいいな。

大豆島  
の  
ほそ道を、  
ちさいアイヌの  
子がひとり。

いろはにほへと  
ちりぬるを  
唐黍たべたべ  
おぼえてくる。

(日本童謡集)

まだ細く、  
香爐の煙と  
消えるまで。

鉛筆の心  
ほそくなれ、  
削つて 削つて  
細くなれ。

三 アイヌの子

大豆島の  
露くさは

北原 白 秋

(西條八十童謡全集)

北原白秋  
名は隆吉。詩人。  
福岡縣の人。明治  
十八年生。

露に濡れ濡れ、  
かはいいな。

大豆島の  
ほそ道を、  
ちさいアイヌの  
子がひとり。

いろはにほへと  
ちりぬるを  
唐黍たべたべ  
おぼえてくる。

(日本童謡集)



島の土手の

一本董、

まだ

誰も

知らぬ。

お湯呑部屋の

窓から見える

董の蕾、

まだ

今日も

咲かぬ。

(童謡集「かねがなる」より)

夏目漱石

名は金之助。英文  
學者。小説家。東  
京市の人。大正五  
年歿、年五十。

寂し<sup>さう</sup>さう。

隅<sup>ぐも</sup>隅

五 峠 の 茶 屋

夏 目 漱 石

「おい。」と聲を掛けたが返事がない。  
軒下から、奥をのぞくと、煤けた障子が立てきつてある。  
向ふ側は見えない。五六足の草鞋が寂し<sup>さう</sup>さうに庇から  
つるされて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄菓子  
の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢とが散  
らばつてゐる。  
「おい。」とまた聲をかける。土間の隅に片寄せてある  
臼の上にふくれてゐた鶏が、驚いて眼を覺す。「くゝゝ、く  
くゝゝ。」と騒ぎだす。敷居のそとに土竈<sup>どんづか</sup>が、今しがたの

ずつと

雨にぬれて、半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜が  
 かけてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ  
 下は焚きつけてある。  
 返事がないから無斷でずつとはひつて、床几の上に腰  
 をおろした。鶏は羽ばたきをして、白から飛びおりる。  
 今度は疊の上にあがつた。障子が締めてなければ、奥ま  
 で駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、「こけつこ  
 つこ。」といふと、雌が細い聲で、「げつこつこ。」といふ。  
 まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。  
 床几の上には一升枡ほどの煙草盆が閑靜に控へて、中  
 にはとぐろを卷いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗

燃え。

る悠長にいぶつてゐる。雨は次第におさまる。

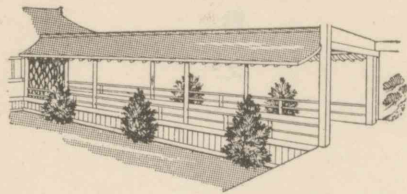
暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさら  
 りとあく。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃  
 えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は  
 暢氣のんきにいぶつてゐる。どうせ出るには極つてゐる。し  
 かし、自分の店を明け放しても苦にならないと見えると  
 ころが、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に  
 腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀と  
 は受取れない。こゝらがまことにおもしろい。その上  
 出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

寶生  
能の五流の一。  
高砂

謡曲の一曲。播州  
高砂の松の下で、  
翁と婆とが肥後國  
の阿蘇の神主友成  
と物語る一曲。

橋懸  
能の樂屋より舞臺  
へ通ふ路。



二三年前寶生の舞臺で高砂を見たことがある。その



(筆齋容池菊) 嫗

時これは美しい活人  
畫だと思つた。はう  
きを擔いだ爺さんが  
橋懸を五六歩來て、そ

ろりと後ろ向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ  
合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの  
顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、  
その表情はびしやりと心のカメラに焼きついてしまつ  
た。茶店の婆さんの顔は、この寫眞に血を通はしたほど  
似てゐる。

「お婆さん、こゝをちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませ  
んで。」

「大分降つたね。」

「生憎なあいたくお天氣で、さぞお困  
りでござんしよ。おゝ、おゝ、  
大分おぬれなさつた。今火  
を焚いて乾かして上げまし  
よ。」

「そこをもう少し燃しつけて  
くれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだ



屋茶の峠

ら寒くなつた。」

「へえ、たゞ今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」  
と立上りながら、しつくと鶏を追ひさげる。「こゝこゝ。」  
と駆けだした夫婦は、焦茶色の畳から駄菓子箱の中を踏  
みつけて、往來へ飛び出す。

「まあ一つ。」と婆さんはいつの間にか、くりぬき盆の上  
に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一  
筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられてゐる。  
「お菓子を。」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねちと微塵  
棒とを持つてくる。

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前に蹲まる。

余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は啼くかね。」

「えゝ、毎日のやうに啼きます。こゝらでは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎けふは、——先刻の雨でどこぞへ逃げました。」  
をりから、竈のうちがぱちくと鳴つて、赤い火がさつ  
と風を起して、一尺餘り吹き出す。

をりから

「さあおあたり。さぞお寒かる。」といふ。軒端のきばを見る  
と、青い煙が突き當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板  
庇ひにからんでゐる。

「あゝ、いゝ心持だ。御蔭で生き返つた。」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗岩が見えだ  
しました。」

逡巡として曇りがちな春の空を、もどかすとばかりに  
吹き拂ふ山嵐の、思ひきりよく通り抜けた前山の一角は、  
未練もなく晴れつくして、老嫗の指さす方に、あら削りの  
柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。

(草枕)

禾末  
聳え。

宮城道雄  
生田流箏曲教授。  
新日本音楽創始  
者。兵庫縣の人。

六物賣の聲

宮城道雄

賣聲なども昔から見ると随分少くなつたが、それでも  
まだ時々色々の物賣の聲が聞かれる。私はあの賣聲で、  
その土地の氣分や又四季によつてそれ／＼の氣持を感  
ぜしめられるやうな氣がする。  
東京では、昔から春先あたりになると苗賣が来る。勿  
論賣聲に上手下手はあるけれども、あの聲を聞くと、何と  
なく夏の近い事を思ふやうな感じがする。  
それから、時期は何時頃かはつきりしないが、よく熊の  
膽を賣りに来るが、あの節を聞くと、何か睡いやうな熊の

子守歌といふやうな感じがする。若し熊が生きてゐたら、きつとあの聲で眠らされると思ふ。實際あれを聞くと、熊が目を細くするやうな感じがして、何となくかはいさうなやうなところがある。

それから、春先に矢張りかうもり傘の張替屋が来ると、天氣のやうな氣がする。續いて下駄の齒入れ屋、張板縁臺さを竹屋なども来るが、さを竹屋の旗竿、さを竹や、さを竹。などと賣り歩く聲を聞くと、天氣の少し暑い加減の氣持がする。

唐辛賣、あれなどは初め聞いた時は、何のことをいつてゐるのかさつぱりわからず、あんな、わけのわからぬことをいつて、あれでよく商賣になると不思議に思つてゐたが、それでも、その音色や、掛け聲で唐辛屋が来たといふことがわかるのである。

鉄庖丁、かみそりのとき屋で、いつか薩摩琵琶のやうな節で歩いてゐたのがあつた。玄米パンなども面白い節で賣り歩いてゐる。納豆賣の聲、又夕方になると豆腐屋の喇叭の音、それは何か私たちの生活の中に入つてゐるやうに思ふ。殊に夕方あの喇叭を聞くと、何だか淋しいやうな氣がする。

草花や朝顔を賣つて歩くのを聞くと、初夏の氣分がする。風鈴賣のガラスの風鈴も、色々の音がして夏の来た

氣分を知ることが出来る。夏、晝寢をしてゐる時など、金魚賣が上手な呼聲を出してゐるのを聞いて、何だか、金魚が尻尾を動かしてゐる、やうに思ふ。夢と金魚賣の聲の境目がごつちやになつて、うつらく、晝寢をする時がある。あの細長い短いやうな聲で、よくその氣分が出てゐる。

東京で時々來るのは、定齋屋であるが、何時か拂方町に私が居た時、私の家の前へ來ると必ず止るのである。それは一方が坂になつてゐるので、その坂を上りつめると、一休みするらしいのである。そのカタ／＼といふ音も割合早くて、正確にしてゐるので、私は家の者に、あの音と

拂方町  
東京市牛込區にあ  
る。

同じ早さで歩いてゐるのかといつて尋ねたら、あの音の二倍の遅さで歩いてゐるのだといはれたことがあつたが、一寸面白いものである。

外をやつて來るあの、チンドン屋であるが、世間ではチンドン屋と思つて馬鹿にしてゐるけれども、あれで一人前になつて、飯を食ふには容易なことではないと思ふ。眞すぐな道をうねつて歩いたり、中入をしたり、喇叭やクラリネットを吹いたりしてゐるが、あれ程上手に樂器を扱ふことが出來たら、何故もつと眞面目な音樂をしないのかと思ふが、やはりさうはいかぬものと思ふ。我々が五分か十分位演奏會などに出る時にも氣分が悪いとか何

とかいふが、チンドン屋のことを思ふと、贅澤はいへないと思ふ。

支那そば屋がチャルメラを上手に吹いて來るのを聞くと、私はいつも西洋のオーボエといふ樂器を思ひ出す。チャルメラの音が實によくオーボエに似てゐるのである。上手な樂手も叶はない程、うまく吹いて來るのがあつて、たまらない程よいものである。

冬になると、おでん屋がメガホーンを吹いて來るが、あれを床の中で聞くと、汽船のやうな音を感じる。それからよく寄席などで、落語家が眞似をするが、鍋焼うどんなどかなりいゝ聲の人がある。私が拂方町にゐた時、家が

オーボエ  
木管樂器の一種。  
管絃樂中に用ひられ、又獨奏・合奏にも用ひられる。縦に吹くもので、チャルメラに似て幽婉素朴な音を出す。

狭くて自分の勉強してゐる前の道を、鍋焼うどんが通るので、よく呼んで、家の者を起して買つて食べたことがあるけれども、それが、夜遅い程、氣分が出るのである。

昔は随分賣聲に名高いのがあつたやうである。よく何町に廻つて來る何の聲はよかつたとか、又その人が來ると持つて來た品物が皆賣れてしまつたとか、いふことがあるやうに、昔は生活が悠暢で、そんな事にも趣味を持つてゐたやうである。今日では誰もそんな賣聲などに氣をとめるやうなことがなくなつて來てゐるらしい。

(雨の念佛)



羽仁もと子  
教育家。自由學園  
長。青森縣の人。

七根の力

羽仁もと子

美しい花、立派な實は、枯れかけた木に咲き、また實のるものではありません。人の目を喜ばせる花や實は、必ず地中に隠れてゐる健全な根の力によるのです。世の中には、この花や實に比ぶべき美しいものが澤山あります。そして私どもは、樹木の花や實の美しいのに氣をとられて、その根のことを思はないやうに、世の表面に現れてゐる多くの名譽や幸福に見とれて、その名譽や幸福を産み出した根本のことには心附かずゐます。ほんたうの名譽は欲しいものです。まことの幸福はま

ほんたう

得よう

似たやう

培倍

た是非とも求めなくてはならないものです。併し、名譽や幸福を得ようくとばかり思つてゐる人に、決してほんたうの名譽や幸福は來ないものです。なぜといふのに、造花に似たやうな空名や、表面ばかりの幸福ならば、人の手で直接に造り出すことが出來ますけれども、ほんたうの花や實は、生きた根の健全な勢力が、雨露や日光の恵に遭つて始めて咲かせ實のらせることが出来るものだからであります。美花を得ようとするならば、根本に培ふことが第一です。根本には頓着なく、花の形を造るならば、出來た花は造花であります。外に現れた名譽や幸福の形を追つて、これを眞似るならば、その形だけはどの

やうに備つても、それは眞實に私どもを満足させる譽ではありません。散つた後に實を結ぶ花ではなく、埃にまみれてすぐに見榮えのない偽せ物の本性を現す花であります。眞の幸福を得るためには、どうしても表面ばかりの細工でなく、是非根本に培ふことに隠れた努力をしなくてはなりません。

まづ私どもの一身についていへば、周囲の凡ての人から愛されることは、最も大きな幸福として誰でも望むところであります。けれども、人に愛されようと思ふならば、まづ自分の心を愛深いものにすることを努めなくてはなりません。お世辭をいひ機嫌をとつて人の愛を得

ようとするのは、ちやうど布や紙で花を模造するのと同じことです。一寸考へると廻り遠いやうにも思はれませんが、人に愛せられたいといふ思ひすらも忘れてしまつて、まづ自分の心に培つて愛深いものにするのが大切です。人を愛する力が我が内部に充ち満ちた時、我が外形の上に咲く花は他人の自分に對する愛の花であります。健全な根は、朝も夕も、たゞ一心に地中の養分を吸収してゐます。それをもつて我が枝の上に美しい花を咲かせて見よう、よい實を結ばせて見ようとは、殆ど思つてゐないのです。けれども時節が來れば、造化は隠れたその根の一年の働きを花に變へて、人目に觸れるやうにし

てくれるのです。我が身を飾る凡てのものは、唯我が心にあるのです。根が地の中に擴がつて、此處彼處から養分を吸収しようとするのには、或時は小石のために阻まれ、或時は他の木の根や、その外いろく、な妨げに遭つて、多くの困難を経験するでせう。私どもの心が愛深くないりたいと思ひ、強い意志が欲しいと思ひ、智慧も明らかに希ふ時にも、また同じやうに種々の容易ならぬ妨げがあります。私どもはこれに打勝つて進まなくてはなりません。この苦心は、木の根の地中における働きと同じやうに、直接に人の目に見えるものではありません。けれども、樹木を支へるものは、主としてこの働きにあるのであります。

伸びすぎた枝は春秋に摘む必要もありません。古い葉は取捨つて新しい葉を茂らせなくてはならないといふこともありません。併し、それらは凡て第二段のことです。私どもの仕事の中には、いろく、と形の上の仕事が澤山あります。けれども、それは凡てまづ内なる心を基礎として、その上に置かなくてはならないのであります。

(羽仁もと子著作集)

二葉亭四迷  
本名は長谷川辰之助。小説家。東京市の人。明治四十二年歿、年四十八。

八狗ころ

二葉亭四迷

一

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜の事であつた。  
宵惑ひの私は、例のとほり宵の口から寢てしまつて、いつ兩親は寢に就いた事やら、一向知らなかつたが、ふと目を覺すと、有明<sup>ありあけ</sup>が枕元をぼんやりと照らして、四邊はほの暗く、しんとしてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。疑ひもなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたましくきやんくくと啼き立てる。其の聲尻が、

有明  
夜あけまでとぼしておくあかし。

堪へ。



二葉亭四迷

やがてか細く悲しげになつて、めいるやうに遠いく處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれないやうに啼き出して、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠<sup>あぐひ</sup>をするやうな時もある。  
私は元來動物好きで、就中<sup>なかんづく</sup>、狗は大好きだから、近處の狗は大抵馴染だ。けれども、こんなか細いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、「どうしたの。寢られないのかえ。」と、母は寢返りを打

短文

つてこちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、  
「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい狗の  
聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つてなあに。」

「棄狗つて……誰かが棄てて行つたのさ。」

私は暫く考へて、

「誰が棄てて行つたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

「何處かの人<sup>が</sup>狗を棄てて行つた。」と、私は二三度繰り  
返して見たが、分らない。

「どうして棄てて行つたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相

手になつて、其の意味を説明してくれて、

「もう晚いから黙つてお寢。」と、優しく言つて、又彼方を  
向いてしまつた。

私もまた夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲  
がやゝ遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。  
寢られぬまゝに、私は夜着の中で、今聽いた母の説明を繰  
り返し繰り返し味はつて見た。まづ何處かの飼狗が縁  
の下で兒を生んだとする。小ぼけなむくくしたのが  
重なり合つて、首を擡げて、みいくと乳房を探してゐる

這ひ

あわて

生え

ところへ、親狗が餘處から歸つて來て、其の側へどきりと横になり、片端から抱へ込んで、べろくゝ舐めると、小さいから、舌の先で、たわいもなく、ころくゝと轉がされる。轉がされては大騒ぎして起き返り、又よちくゝと這ひよつて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹なかを探り廻り、漸く思ふ柔らかな乳首を探り當て、あわててちうと吸ひ附いて、小さな両手で揉み立てくゝ吸ひだすと、甘い温かな乳汁がどくどくと出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。すると、腋の下からまだ乳首に有りつかない兄弟が、鼻面で割り込んで來る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒ぎをやつてみるが、たうと

融けさう  
ついで

う取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸ひ附く。其の中にお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、融けさうな好い心持になり、ついうとくゝとなると、くんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸ひ附いて、一しきり吸ひ立てるが、直ぐに又たわいなくうとくゝとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の時、忽ち、暗闇からもぢやくゝと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つて居るところを、むずと引つ摑み、宙に吊るす。驚いて目をぼつちり開け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つ

て藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻搔いてゐる中に、ふと足搔あが自由になる。と、領元なりもとを撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろうろとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、恐しく寒くなる。身慄ひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちく這ひ出し、雨の夜中をたゞひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまようて行つたやうだつた

さまようて

が、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

二

「お母さんく、門の中へ這入つて來たやうだよ。」と、私  
 が何だか居たたまらないやうな氣になつて、又母に言ひ  
 かけると、母は氣の無きさうな聲で、  
 「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ……あら、あんなに啼いてゐる……。」

と、折から絶え入るやうに啼き叫ぶ狗の聲に、私は我知ら

絶え。



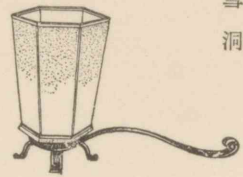
こはい

ずむつくり起きあがつたが、何だか一人ではこはいやうな気がして、

「よう、お母さん、行つて見よう、よう！」

「ほんたうに仕様がなない兒だねえ。」と、口小言を言ひ言ひ、母も澁々起きて、雪洞ほんぼりを點けて立ちあがつたから、私も其の後に、ついて、玄關……と言つてもついで次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へおりて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらくくと靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道



雪洞

の光が颯と戶外の暗黒やみを破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も経たぬ、むくくと太つた、赤ちやけた狗ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉り立てて、此方を見上げてゐる。なりは私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。「おやく、まあ、可愛らしい。」と、母もつい言つてしまつた。況や私は狗好きだ。じつとして見てはゐられない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。



と、さほど怖れた様子もなく、ちよこくと側へ来て、流石さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べろくと舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を舉げて、ぼたぼたやつてゐたが、果てはやはりと痛まないほどに小指を咬む。

私は、可愛くてくたまらない。母の顔を見上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれど、居附いてしまふと仕方がないねえ。」と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所

しまふ。

へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。

早速履脱へ引入れてこれをあてがふと、仔狗は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに、まづぴちやくと舐めだしたが、汁が鼻の孔へはひると見えて、時々くしんくと小さな嚏くしゃみをする。忽ち汁を舐め盡くして、今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながら、がつがつと食べ出したが、飯はまだ食ひ慣れぬかして、兎角上顎に引つ附く。首を掉つて見るが、そんな事では中々取れない。果ては前足で口の端を引つ搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙ひまに、私は母と談判を始めて、  
「今晚一晩泊めて遣つて。」と、雪洞を持つた手にぶらさ

がる。母は一寸濫つたが、もうか  
うなつては仕方がない。

狗  
「お父さんに叱られるけれども。」  
こ  
と言ひながら、つまりさん棧だら俵ほふ法師しを  
る  
捜して来て、履脱の隅に敷いて遣  
つたは好かつたが、其の晩一晩啼  
き通されて、私はちつとも知らな



言はれ

んだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひの父は泊めた其の夜を啼き明かされると、うん

ざりしてしまつて、翌日は是非逐ひ出すと言ひ出したか  
ら、私は仔狗を抱いて逃げ廻つて、如何しても放さなかつ  
た。父は困つた顔をしてゐたが、併しそれも一時のこと  
で、其のうちには仔狗も獨り寝に慣れて、夜も啼かなくなる  
と、逐ひ出す筈のものに、何時しかポチと言ふ名まで附い  
て、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしま  
つた。

(平 凡)

湯淺常山  
名は元嶺。字は文  
祥。江戸時代の儒  
者。天明元年(西  
一八一〇)歿、年七十四。

九 寢殿の雀

湯 淺 常 山

大 殿  
徳川秀忠

やうく

松平伊豆守信綱、實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。家光公御誕生ありし時より御家人になされ、御遊び相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に、雀の巢をくひ子を産みたるを、若君此方より御覽じて、「長四郎よ、取りてまゐらせよ。」と仰せけるに、年十一歳なれば、如何にも叶ふまじきよしを申す。「晝は驚きて飛び去りもやせん。よく見置きて、日暮れて此方の軒に梯子さして登り、忍び行きて捕るべし。」とありあふ人々勸めければ、力なく、日暮に忍び登りてやうやう傳ひ行きけるが、踏み損じて御壺の内にどうと墜つ。

台徳院  
徳川秀忠

教へ。

候へ。

台徳院殿御刀とらせ給ひ、障子開かせ給へば、御臺所ともし火とつて出でさせ給ひ、御覽ずるに、長四郎にてありけり。台徳院殿、「汝は何故爰には來れるぞ。」とお尋ねありしに、「今日の晝、御殿の軒に雀の子産みたるを見て、あまりのほしさに捕りに参りて候。」と申す。「いや、己が心にはあらじ。誰が教へけるぞ。」と、さまざまに御推問あれども、幾度もあらそひぬ。「年比にも似ぬ不敵なれば。」とて、大きな袋の中におし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事の由をありのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へ。」と仰せけれども、猶詞をかへず。

竹千代君  
徳川家光

つひに

夜既に明けて、常の御座を出でさせ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、彼が幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰せなりと申さざることを深く感じ給ひ、女房たちに仰せありて、朝飯を召して、「たべ候へ。」とて賜はりて、また口を封じ給ひてけり。

晝ほど入らせ給ひて、また御推問あれども、つひにその詞屈せず。御臺所御詫言ありしかば、「さらば重ねてを慎めよ。」と仰せありて御赦あり。御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にて生ひ立ちたらんには、竹千代殿のためには、雙びなき忠臣にてこそ候はめ。と、殊の外に悦ばせ給ひけりとかや。

丈のかい  
しやし



朝の良奈

大類伸  
文學博士。東北帝  
國大學教授。東京  
市の人。明治十七  
年生。

一〇 奈良の初夏

大

類

伸

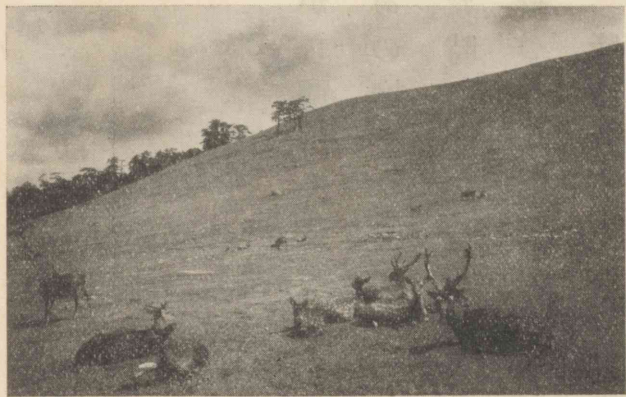
一 嫩草山

嫩草山、何と優しい名であります。櫻も散つてこれから躑躅や藤の季節に移らうといふ時、一本の樹もないあの撫でたやうになだらかな山一面に若草の萌えだした時、そして若草の間をところ／＼山躑躅の花が鶉色とぎいろに彩つた時、嫩草山の姿は實に優しい眺です。

紫の藤浪が池水に咲きかゝる此の頃、私は嘗て嫩草山に遊んだ時のことを思ひ出さずには居られません。昔の人も、

藤浪の云々  
大伴四繩の歌。

藤浪の花はさかりになり藤の花が長い房をたわして美しくなりましたにけり  
奈良の都を思ほすや君あたらかも奈良の都を思ふなつて下さいませ



嫩草山

と詠ひました。藤の咲く頃は、いつも奈良と此の歌とが思ひ出されます。  
嫩草山は奈良の町の東にある山で、近處の山々は樹が鬱蒼と茂つて居るのに、これは草ばかり生えて居る。散歩がてら登るのに恰好な山であります。若草の芽の出る前、此の山の枯

越え。

草を焼く時はなかく、壯觀ださうで、寒い風が奈良の大路を吹き捲くる黄昏ごろ、門前に立つと、春日の森を越えて東の方に火がちらちらと見えて、いひ知れぬ眺だといひます。それも忘れ難い旅の思ひ出の一つではあります。せうが、此の頃の嫩草山はそれにも増して楽しい眺だと思はれます。町の人々は澤山に此の山に遊びに来て居ます。その中に、年若い女たちの綺麗な装ひをなし、山躰の咲き亂れた山を登つたり下つたりして、鬼ごっこなどをして遊び戯れて居るのが見えます。若草に腰をおろして、其等の光景に眺め入つて居れば、誰でも旅の憂さを忘れます。

二 春日野

奈良の附近は到る處に古蹟が多く、大きな御寺の屋根が森の間に見え隠れするのや、古い五重塔が歴史を語り顔に霞んで見えるのや、畑の間に石の礎だけ残つて、其の石の割れ目に寂しく堇の咲き出でたのや、いづれも昔を思ひ出す種とならないものはありません。

嫩草山の麓、そこは春日野と呼ばれて居ますが、この野ほど色々の語り草に富んだ處はありません。可愛い無数の鹿、春日神社の眷屬として奈良の人々が大切にして居る、そして昔は、若しもその鹿に危害を加へると、其の人は生きながら地中に石埋めにされたといふほど大切に

加へ。



原の間に、雪消の澤ゆきげと呼ばれる小さい池さばがあります。昔

にされた鹿は、今もなほ群をなしてのどやかに遊んで居

ます。又今はすっかり俗化し

ましたが、奈良名所の猿澤池も

この春日野の一部に見られま

す。この池は、昔平城の帝の御

時に、年若い采女が、己が身の上

をはかなんで入水した處だと

いふので、有名になつて居ます。

猿澤の池より少し東に、可愛

い鹿の澤山遊んで居る緑の草

池

春來れば云々  
崇徳天皇御製。

の歌にも、

春來れば雪解の澤に袖たれて

まだうら若き若菜をぞ摘む

とありますが、奈良朝の昔に、彼の優美な衣を着けたうら若い少女たちが、己が身の上にも似たうら若い若菜を摘んだのも、いづれは此の池の畔であつたのでありませう。今は紫の色ゆかしげな藤の花が長い房を水に垂れて居て、あたりには新しい時代の少女たちが翳す赤や白の色美しい日傘の色が、目立つて晴れぐしう見えて居ます。

(史蹟めぐり)

はれぐしう。

二 天真爛漫

山脇 房子

山脇房子

前山脇高等女學校  
長。島根縣の人。  
昭和十年歿、年六十九。

抑へ。

慎み深いといふことは、婦人にとつて大切なことでもあります。が、さりとてあまり過ぎると、固くるしくなつて、温かい情味が乏しいかのやうに見えます。總じて我が國の婦人は、人の前ではあまりに情を抑へ過ぎるために、冷淡無愛想に陥る弊があります。

これは東洋古來の道德が、喜怒哀樂を色に表さぬのを善いこととして來たためでありませうが、やはり程々に己の感情なり氣持なりを顔色や態度に表す方が、温かみもあり、懐かしみも生じて、交際上誠によいやうに思ひま

態 熊 能



す。殊に少女時代、處女時代には、無邪氣に、快活に、愛嬌よく、全く作らず飾らず、天真爛漫に振舞ふのがよいと思ひます。處女時代は婦人一生の花であるばかりでなく、實に人生の花であります。殊に處女の、優しい、ゆかしい、美しい心は、家庭に平和と悦樂とを齎し、社會に光明と幸福とを與へます。私は、いつも生徒達に、あなたがたは何故そんなにむづかしい困つたやうな顔をしてゐますか。」と申すのですが、全く處女時代は何の苦勞もないのですから、もつとのんびりと生き、した、豊かな感情の持主であつてほしいと思ひます。

處女時代ばかりでなく、嫁入して人の妻となり、一家の

與興

むづかしい

主婦となりましても、天真爛漫な態度を以て人に接することが極めて大切であります。純情から發した天真爛漫の愛嬌程、人に好愛の情を起させるものはありません。しかし、如何に天真爛漫な態度がよいからといつて、禮儀作法の心得がなければ、思ひがけぬ失敗を招くことがあります。フランス人は、相手の人に不快の感じを抱かせぬために、イギリス人は自己の品位を重んずるために、何れも禮儀作法に注意する傾があります。人に快感を與へるやうに心掛ければ、自然と行爲が親切になり、優しくなり、温かい理解も生ずるやうになります。自己の品位を重んずれば、自然、行動が上品となり、優

雅の中にも凜としたところが出来、豊かな情味の中にも明らかな理智が働きます。しかし、かうなるのはなかなか一朝一夕のことではありませんが、こゝまで修業しなければ、人に敬愛されるやうにはなりません。尤も人に敬愛されようなどといふ心があつては、それだけ心が曇り、行ひが賤しくなりますから、あまり好ましくありません。たゞ、人のために盡くさうとする燃えるやうな熱情、純真無垢の至誠が自然に發露して、天真爛漫な愛嬌となり、奥ゆかしい禮儀作法となり、美となり、聰明となり、温かい情味となつてこそ、求めないでも萬人に敬愛されるやうになります。

一三 幼き日

中 勘 助

中 勘 助  
詩人。小説家。東京市の人。明治十八年生。

古い家に假住ひをしてゐる間に末の妹が生まれた。皆は私がまた一人の兄さんになつたの故、おとなしくせねばならないといひながら、何といふ名にしようと相談をかけたから、私は子供心にえらい責任を感じて、一所懸命に妹の名前を考へた。美しい模様のついた蒲團の下に、小さな口をあいてすやくと眠つてる子供のそばに、腹這ひながら、これが自分の下につく人間だと思へば急に得意になつて、「よし可愛がつてやらう。」といふ氣がし

おづく

しょう

た。そして色々名前を考へた擧句、結局自分の大好きな「栗」といふのが一番いゝと思つたが、内心非常な權威と自信とをもちながらも、常々何かいふとぢきに笑はれるので、それが嫌さにさんざ躊躇した末、おづくと茶の間へ行つて、

「栗といふ名にしよう。」

といつたら、皆は顔見合はせてどつと笑つたので、私は火の出る様に上氣してしよげてしまつた。折角いゝ名をつけて可愛がつてやらうとしたのにと思つて悔し涙が出た。

伯母さんはよい空気を吸はせるといつて、朝早く私を

おぶひ出しては草地を歩く。雑草の花、雑木の花が此處彼處に咲いてゐる。今迄ろくに草といふものを見たこともなく、木も五六本の庭木のほか知らなかつた子には、このかなり広い草だらけの空地は自分の爲につくられ、たかと思はれて、川ぼたのお稻荷様はなくとも何の不足もなしに、折々背中から降りて一人遊ぶやうになつた。

少しばかりの茶畑を間にして南隣に少林寺といふ禪寺があつたが、その寺内が廣いのと、信心深い伯母さんにはお寺といふものが、何となく懐かしかつたのであらう、ときどき其處へつれて行かれた。其處には太いあら削りの角材を門柱の形に立て、扉なしに左右へ細い角材を

立て列ねて塀のかはりにしてある。門から玄關迄二十間ばかりの間二行に敷いた石の兩わきは、荒れた茶畑になつて處々杉の木やなにか立つてゐる。私はよくその茶の花をとつて遊びにさせてもらつたが、枝に脆い茶の花は一つとると、ぼらくと幾つもいつしよに散つて地に落ちた。また雨のあとなどには、茶の木くんに雫が一杯たまつてきら／＼と光つてゐる。なんの奇もないながらかすかなさびのある茶の花は幼い折の思ひ出にふさはしい花である。丸みをもつた白い花瓣がふつくらと黄色い葎を圍んで暗緑のちぶれた葉のかげに咲く。それをすつぽりと鼻へ押しつけて嗅ぐのが癖であつた。

瓣辨辯

左手の閑伽井のそばの金木犀は花が咲けば甘い香を漂よはせ、その井戸車の軋る音は靜かな茶畑を越えて私の家までも響く。本堂の玄關にある大衝立には極彩色の雌雄の孔雀がついてゐた。鶏冠とさかを立てた雄鳥が蓑の様な尾をさげて立つてゐるそばに、やゝ小さい雌鳥が身をかがめて何か啄む様な姿勢をしてゐる。そのまはりに咲き亂れてゐる紅白の牡丹の花には、蝶々がいくつか戯れてゐた。私は背中から其の繪に見とれて、伯母さん一流の想像を逞しくした繪ときを聽いてゐる時に、どうかすると綺麗な女の子が衝立の前へつと現れて、答める様にこちらを見ては引込んで行くことがあつた。

植  
ゑ。

三四十坪ほどの裏のあき地はなかば花壇に、なかば畑  
 になつてゐた。夏の初の頃になれば垣根の外を苗賣り  
 が涼しい聲をして通る。伯母さんはそれ呼んで野菜  
 ものの苗を買ふ。藁でこしらへた箱の中にしつとりと  
 水氣をふくんだ細かい土がはひつて、いろ／＼な苗がい  
 きいきと二葉を出してゐる。菅笠をかぶつた苗賣りの  
 男がさも大事さうにそれをすくひ出す。伯母さんは茄  
 子だの瓜だのを少しづつ買つて畑へ植ゑる。茄子の紫  
 がかつた苗、南瓜や絲瓜へまのうす白く粉をふいたやうな苗  
 が楕圓形の二葉をそよがせてゐるのを、朝晩二人して如

露をもつて行つては水をかけてやる。苗は見るたんび  
 に成長して、蔓が出たり、葉が出たり、しまひには畑中のた  
 くり廻つて大きな實をぶらさげる。それを楽しみにし  
 て検分に行く。そんな世話の好きな伯母さんは愚痴を  
 いひ／＼竹を立てて手をとつてやると、ひと巻きふた巻  
 きと日に／＼蔓が巻きついて、荒つぽい葉の間に黄色や  
 紫の花が咲く。そこへ丸つこい蛇が来て我がもの顔に  
 飛び廻つては花の中へもぐつて行く。むだ花がころこ  
 ろと落ちるうちにほんとの花の根もとにふくらみが出  
 来て、平たくなり、長細くなりして世にいふ唐茄子や南瓜  
 の形が出来あがる。茄子の巾着なり、絲瓜のぬうつとし

書取

た恰好、つぶくして憎らしい胡瓜など。葉をのけてみて思ひもよらぬ實のいつたのを見つけた時の嬉しさはない。なた豆、ふぢ豆、ちび筆に似た葱の花。

ある時唐茄子の苗を買つて植ゑたら、育つにしたがつて様子が變つて來てたうとう瓢箪になつた。私は幾つとなくぶらさがつた瓢箪を見て大喜びであつたが、伯母さんは苗賣りにまんまと一杯くはされたのを悔しがつて、ろくに世話をしてやらなかつたものでみんな落ちてしまつた。それから下の町の青物屋へ買ひに行くことにしたが、伯母さんは何の苗を見ても瓢箪ぢやないかと疑つても、もし生えてから瓢箪がなつたら瓢箪の木を返

生え。

鳳仙花



おしろい



しに來るがいゝかといつて青物屋をきめつけた。畑をめぐる杉垣のくろには、祖母の栗と私が拾つてきてまいた胡瓜が芽をだしてゐる。また祖母が好きで植ゑておいた鳳仙花の種がちらばつてあちらこちらに咲く。とりたてて見どころのない草ながら私も鳳仙花が好きである。

いたづらに花をとつて爪を染めたりする。おしろいの實をつぶして白い粉をだすのが面白かつた。杏の花、緋桃の花。巴旦杏の古い木があつて雲のやうに青白い花を咲かせたが、それは私たち兄弟の何よりの楽しみで、鳥の來るのを氣にしては追ひにいつた。大きな實が鈴

なりになるので枝がしなつて地びたについてしまふ。背のとぐところでは手でちぎり、高い枝のは打落して重たい箒をかゝへて歸る。花壇には鬼百合や白百合が咲く。私はあまり明るい色、濃厚な色を見れば胸ぐるしい。壓迫を感じるのが常であつたが、花でいへば百合の雄蕊の頭にこつとりとついてゐる焦げ色の花粉などがさうであつた。

(銀の匙)

島崎藤村

名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

一三 子供のため

一書 籍

島崎藤村

名もない草が、路ばたの石のわきに咲いて居ました。そこへ私を通りかゝりました。

「今日は。お前さんは何をそんなに急いで居るのですか。」

と、その草が聲をかけました。「わたしは貧しいものですから、讀みたい本も思ふやうには手に入りません。でも、わたしは好きですからいろいろ本を讀んで、お友達に後れたくないと思ふのです。わたしは精神の旅をして見たいと思ふのです。わたしは小さな旅人です。それでかうして急いで居るのです。」と答へました。すると、

かうして

下三 藤村をひらめ

讀まう。

「まあ、この石の上に腰をかけて見て下さい。讀まうとさへ思へば、本はこの石の上にもあります。わたしも名もない草ですが、あなたのやうな人に讀んで貰ひたいと思つて、かうして小さな本をひろげて居るのです。」  
と、その草はいひました。

二 圖 書 館

ある日、私は私の學校の圖書館の二階へ上つて見ました。そこでは高い聲で話をするものもありませんでしたから、まるでそこらは森として居ました。たまに聞えて來るものは、鉛筆を削る音ぐらゐるのものでした。私は本棚の間を見て廻りました。本と本とが澤山むかひあ

ぐらゐ。

むかひ。

つて並んで居ます。誰も手に觸れたことのないやうな本が、塵埃の間から顔を出して居るものもあります。椅子でも持つて來なければ、手の届かないやうな高い棚の上まで、一ぱいに古い本が並んで居ます。

そこは書籍の墓地でした。いろ／＼な本を書いた人達が、その静かなところで眠つて居ました。ところどころが不思議にも此方ですこし眼をさましかけましたら、そこに眠つて居ると思つた人が、お墓から起き上つて來ました。青々とした麥畑の中に鳴く雲雀の聲がして來たり、ひろ／＼とした野原のほとりから百姓の唄が聞えて來たりした時は、私もびつくりしました。



その時になつて、そんな墓に眠つて居ると思つた人達が、私達の胸に活きかへり／＼する時のあることを知りました。

(藤村讀本第二卷)

### 三 屋根の石と水車

屋根の石は、村はづれにある水車小屋の板屋根の上の石でした。この石は自分の載つてゐる板屋根の上から、毎日々々水車の廻るのを眺めてゐました。

「お前さんは毎日動いてゐますね。」

と石が言ひましたら、

「さういふお前さんは又、毎日坐つたきりですね。」

と水車が答へました。この水車は物を言ふにもじつと

してゐないで、廻りながら返事をしてゐました。

風や雪で水車小屋の埋まつてしまひさうな日が來ました。石は毎日坐つてゐるどころか、どうかすると風に吹き飛ばされて、板屋根の上から轉がり落ちさうになりました。水車は毎日動いてゐるどころか、吹きつける雪に埋められました。まるで車の廻らなくなつてしまつたこともありました。

この恐しい目に逢つた後で、屋根の石と水車とが、また顔を合はせました。石はもう水車に向つて、

「お前さんは毎日動いてゐますね。」

とは言はなくなりました。水車も、もう屋根の石に向つ

て、  
 「お前さんは毎日坐つたきりですね。」  
 とは言はなくなりました。

(子供のため)

一四 七夕祭

吉田 絃二郎

吉田絃二郎  
 名は源次郎。小説家。早稻田大學講師。佐賀縣の人。明治十九年生。

七夕祭は、田舎の少女にとつては楽しい年中行事の一つである。  
 夜毎に銀河が近くはつきりと見えるやうになつて來ると、少女たちの頭には、笹に吊るした色紙が浮かんで來るのである。



七夕祭

野天のなかに焚かれてゐる風呂の中で、私たちは母親から牽牛星や織女星を指さして教へられたのであつた。  
 何といふ星であらうか、銀河から少し南西に寄つて三角形を作つた星群がある。そして頂點をなした中央の星だけが紅く見えるのである。  
 「真中の星さまが紅いだらう。あれは左右の星さまを擔いでるからだ。右と左の星は秋の收穫みりからだ。右と左の星が重くな

るので、眞中の星さまの顔が紅くなる。」といふやうな母の話、私たちは野天風呂の湯をばちやく／＼させながら聞いたものであつた。

私たちは三日も四日も前から、紅・白・緑・黄・浅黄・青などの色紙を買つて来て、短冊を拵へては、朝早く起きて、蓮や稻の葉の露を集めて墨を磨つて、それに字を書いた。六日の朝は、山から大きな男が葉のついた男竹を擔いで賣りに來るのであつた。

他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが、子供心にも誇であつた。」「さういふ姉や妹たちは五色の紙で着物を裁つて星にさゝげる

のであつた。

少女たちの身になると、七夕の宵に雨が降るといふことは、七夕竿が濡れることのために悲しかつたのであつた。

私たちは雨に濡らすまいと思つて、七夕竿をどうかしようとする。親たちは、「雨が降つてゐても七夕さまは短冊を見て下さるから——」と言つて、私たちの手をとめた。雨は大抵嵐をつれてゐたので、笹に結びつけられた色紙は自由に飛んで、茄子畑だの黍畑だのへ散つて行つた。

(小鳥の來る日)

饗庭篁村  
名は與三郎。小説家。東京市の人。大正十一年歿、年六十八。

文化元年  
光格天皇の御宇(二四六四)。

壽經寺

東京市小石川區表町の無量山傳通院。

ゆゑ。

大田南畝

名は翠、號は蜀山人。狂歌師。文政六年(二四三三)歿、年七十五。

一五 蜀山人の盆燈籠

饗庭 篁村

文化元年の頃とか、小石川に庄助と呼ぶ男住めり。日備又は擔ぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、



村 篁 庭 饗

小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠といふものを持行き、て賣りけるところ、いかにしけるにや、買ふもの更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしは多ければ、力を落し、情なき顔して擔ぎ歸りしが、大田南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄り、臺所の者に向ひ、

神樂坂  
今の東京市牛込區に在る坂の名。

「偕々困る事かな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂坂の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も呑まれ申さず。」と話しかこちけり。

南畝翁は座敷にてこれを聞かれ、手に持つ盃を下に置き、

「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍らのもの、  
「かやうくにて、またかのぐづ男が泣き申し候。」とい

ひければ、翁は臺所へ出でられ、

「偕も氣の毒なる事よ。颯の下が乾きては誰も難儀ならん。我がいふ如くせば、少しは賣るゝ事あるべし。」といはれければ、

「それは有難き事に候。いかに致すべきか。」と、翁の顔を如何にも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、

「これにてその燈籠を張り替へよ。我それに何か書きてやらん。」との事に、悦びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張り替へて持來れば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔き、一禮を述べ

て荷ひ歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣ねざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書ひだの反古張にては買ふ人はあるまじ。さりながら、あれほどに仰せられしものなれば、まづ明朝神樂坂の市へ持行き、賣れ残りたらば、その事を申して歎きつき、二百匹も借りて外商ひの種とせん。」と、工面顔にて、足も重く二三町歩む向ふより來りし侍、往きすぎしが、供の者にいひつけ、

「その燈籠は賣物か。」と問はしむ。偕はと悦び、

「いかにも賣物に候。やうく傳つとを求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あてもありて拵へ候なれども、

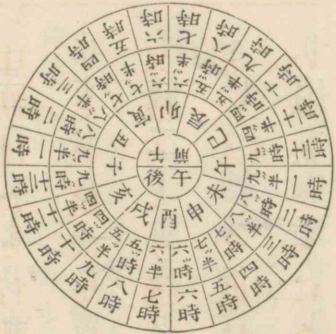
このやうには入り申さず候ゆる、お望みならば差上げ申さん。」といふに、

「價はいかほどぞ。」と問ふ。幾許といひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて「五十文。」といふ。

「その値にて二つくれよ。」と、百文渡して買ひ行きたり。又後ろより通りかゝりし人、それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は息を一杯に吹いて「六十四文。」といふ。いふがまゝにまた買ひ行きたり。後ろよりまた、此方へも二つ、我にも一つと、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つて女房にかくと話せば、

寢惚様  
蜀山人自ら寢惚先  
生と戲號した。

七つ  
今の午前四時頃。



「誠に寢惚様は生佛様なり。有難き事なり。明日は早くより持出で給へ。我も参りて手傳ひ申さん。お前一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智慧の慾が先なり。

夫婦にこゝ、七つ起きして神樂坂へ行き、並ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠は珍し。」と、立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて、「百文。」といへば、「さもあらん。」と百文にて買ひ行く。女房夫の袖を引き、

「百でも値切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文といひ給へ。」と、また智

五つ半  
今の午前九時頃。

慧をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百文はあまり高からう。百五十文。」といふ。それより百五十文にて六七十賣り、終には先見明らかなるその妻の言の如く、

「二百文よりまかりませぬ。」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつ轉びつ翁の宅へ來り、亭主をかきのけて女房まかり出で、有難いと數千遍述べて、いかにも先生は生神様なり。」と、今度は神あしらひにして悦び歸りしとぞ。

翁が酔餘の戯れ、よく枯骨に膏すといふべし。

(雀躍)

坪内逍遙

名は雄藏。文學博士。英文學者。名古屋市の人。昭和十年歿、年七十七。

一六 神樂師の息子

坪内 逍遙

第一幕

前に大きな池があつて、そのうしろに森があつて、池の岸の近くに辨天様の社がある。

銀吉、十歳ぐらゐの村の子、粗末な綿物を着て、手に横笛を持つて出て來る。或上手な神樂師の息子で、持つてゐる笛は父親が平素から使ひならしてゐた樂器なのである。

銀吉 死んだおとうさんは上手だつたなあ！ どうした

らあゝいふ風に吹けるか知ら？ どうかしてあゝ

いふ風に吹きたいなあ！

といろく、と吹きかけて見るが、いゝ音色が出ない。村の男の子や女の子が大勢出て來る。(新一・お松・由松らがお先に立つ)

おとうさん

新一 御覽、あそこに銀ちゃんがあるよ。君たちはあの子を知つてゐるかい？

お松 え、あの子のおとつさんは笛を吹くことがお上手だつたでせう。

由松 さうさ、あの子のおとつさんはお神樂師だつたもの。

新一 銀ちゃん、君もお神樂師になるのかい？ 一つ吹いて聞かしてくれ給へ。

銀吉 わたいにや吹けないよ。まだ習はないんだもの。

新一 習はなかつたつて、少し位は吹けさうなもんだねえ。僕にだつて少しぐらゐは吹けるよ。君は笛吹きの子ぢやあないか？

お松 吹いて聞かして頂戴な、よう銀ちゃん。

新一 君、そら、よく君のおとつさんが吹いたつけね、そらトツピキピイのピッてのがあるだらう。あれが面白いよ。あれを吹いて見たまへよ。よう！

銀吉 ぢや、やつて見ようか？ 吹けるかも知れんよ。——  
銀吉吹く。けれども、ちつともいゝ音色が出ない。變な音ばかり出る。

ブウツ！ ジユウツ！ ブウツ！ ジユウツ！

ジユ！ くくく ジユ！ くくく！

みんながころげ廻つて笑ふ。

皆々 あは、は、は、は！ あは、は、は、は！ 駄目だく！  
笛吹きの子の癖に、駄目だなあ！ 下手だなあ！



あはゝゝゝゝ！ あはゝゝゝゝ！  
 新一 人を馬鹿にしてら！ ねえ、胴上げしてはうり出してやらう。

新一と由松が先に立つて銀吉を胴上げにする。お松が止めようとするが、それを追ひのけて、大勢で銀吉をあつちこつち持ち廻つて投げ出し。

男の子

わあい〜！ わあい〜！

と囃し立てていつてしまふ。女の子らも一しよに入る。銀吉は聲をあげて悔しがつて泣く。

銀吉

あゝ、くやしい〜！ おとつさんの生きてゐるう

ちに、言ふことを聽いて習つとけばよかつた。笛を吹けば、誰でも〜みんな浮かれて、踊り出すやうな

上手な笛吹きになりたい。あゝ、くやしい！ くやしい！

と泣く。

社の扉が内から開いて、辨天さまが出て来る。

辨天

(銀吉のそばへ来て) 銀吉や、お泣きでない。え、どうしたの？

なぜ泣くの？

銀吉 笛が吹けないもんだから、みんながわたいを馬鹿にして、ひどい目に逢はしたあ！ わああ！ わああ！

と大きな聲で泣く。

辨天

泣かなくてもいゝよ。わたしが手傳つて、吹くことを教へてあげるから。お前は上手な笛吹きになりたいのかい？

○銀吉 死んだおとつさんのやうに、だれでもみんな浮かれて踊り出すやうに上手に吹きたいんです。

○辨天 何でもわたしのいひつける通りにしますか？

○銀吉 え、何でもします。

○辨天 きつとだね、ぢや、わたしについておいで、吹くことを教へてあげますから。さうしておぼえたら、明日から、ひまさへあればお温習（まなぶ）をなさい。さうしてこれから一年の間は、一日だつてなまけぢやいけないよ。さうすれば、きつとおとつさんの通りな上手になります。さうして誰でもお前の笛を聞けば、浮かれて、面白がつて踊ります。さ、ついで。

○辨天 さまは森の方へ進む。銀吉はその後について行く。

### 第二幕

場所はおなじところ。時は一年たつた後のつもり。銀吉が又笛を持つて出て来る。

○銀吉 辨天さまに教はつてから、もう丁度一年になつた。

わたいは何もかも辨天さまのいつたやうにした。あれから一日だつて休みやしなかつた。自分ぢや分らないが、上手になつたか知ら？ 上手になりや、それを聞く者は、誰でも浮かれて、面白がつて踊り出す筈なんだから、誰か來さうだつたら、吹いて見ようや。——（二方を見て） あ、およた婆さんが来る。 吹い

てやらう。けれどもあの足附ぢや踊りさうにもないなあ！

と歌口をしめして吹く準備をする。

村のおよた婆さんが海老のやうに腰をまげて、鶏卵の籠を持つて、びつこを引くやうにして、よたくと出て来る。

およた

やれく！ やれく！ やれく！ やれく！

あゝ、あゝどうもく、リウマチスがいたくてく！

と立ちどまつて、溜息をして、

あゝ、もうとても一足もあるかれやしない。

銀吉が笛を面白く吹きはじめる。

およた

(聞きほれて) ま、なんていゝ音色だらう！ 陽氣だこ

と！ 面白いこと！ おやくくくく—— おやくく

おや！ (と、だんく浮かれ出して) これやもう、じつとしちやゐられないよ。

ひよこくくと歩きはじめて、いつの間にやら、ぶきつちやうな風をしつゝ踊り出す。だんく身軽に愉快さうに踊り廻る。しまひには鶏卵の籠を抛り出してしまつて踊る。

銀吉が笛を吹きやめると、婆さんもすぐに踊りをやめる。さうして苦しさうにはあく、といつて喘ぐ。

こゝへ氣むづかしさうな、こはい顔をしたお爺さんが、馬に荷を背負はせて牽いて出て来る。

爺さん

しつ！ しつ！ やい、どうした！ さ、いけく！

なぜ歩かんのだ！

と手に持つてゐる竹で馬の尻をぶつ。

馬

ひゅゅん！ ひゅゅん！

爺さん しっ！ しっ！ さ、さ！

銀吉が又笛を吹きはじめ。  
爺さんは通り過ぎたが、立ちどまつて、

爺さん

おや！ ありや何だ？ 笛だな！ 陽気な、面白い

笛だ。おや〜！ これや不思議だ。自然に

此の足があがつて、此の手がこんなになつて！ お

やおや！ おや〜！

銀吉は盛んに吹く。爺さん初のうちは、しちむづかしい、こはい  
顔をして、いや〜踊るといふ風に踊つてゐたが、笛が調子づく  
につれて、だん〜浮かれ出し、持つてゐた竹の鞭も、馬の綱も手  
から放してしまつて、愉快さうに、嬉しさうな顔をして踊り廻る。  
およた婆さんも又踊り出す。

銀吉が吹きやめると、二人も踊りをやめて同じやうにはア〜

といつて喘ぐ。こゝへ前幕の新一や由松や其の他の子供が又  
出て来る。

お松

今のあのいゝ聲はどこから聞えて来たらうね？

わたいた踊り出したくなつてよ。

銀吉が又吹きはじめる。

新由

あゝ、あれだ〜！

お松

銀ちゃんか吹いてゐるよ。あゝ、いゝ音色なこと！

いゝねえ！

皆々

面白いねえ！

子供らもみんな踊り出す。爺さんも、およた婆さんも又踊る。  
馬までが踊りさうにする。荷物がころげ落ちる。馬はそれか  
まはず、後足で立つて、人間と一しよに踊る。吹きやめるとみ

んな踊りをやめる。

新一 おい〜！ およた婆さん。御覽なさいよ。籠が  
ひつくりかへつたよ。あら！ 鶏卵がみんな破れ  
つちまつたよ。

およた たまごなんかかまはないよ。銀吉さん、お前さんの  
その笛のおかげで、わたしのリウマチスがなほりま  
したよ。

お松 あら！ お爺さん、お前さんの大事な鞭ぢやなくつ  
て、そこに落ちてるのは？ 折れつちまつてよ、馬が  
踏んだもんだから。

爺さん もう鞭なんかいらぬ。もうわしは馬をぶたうな

黄んて氣になれない。(銀吉に)お前さんの笛を聞いた  
ら、わしの氣がかはつてしまつた。何だか若くなつ  
たやうだ。人でも馬でもみんな可愛ゆくなつた。

銀吉 お爺さん、馬の荷物がおつこちてゐるよ。

爺さん もう一ぺん踊つてから附けてやるよ。

皆々 さうよ！ もう一ぺん、もう一ぺん！

銀吉が又吹き始める。みんなが又踊り始める。社の扉が開い  
て辨天さまが覗く。

辨天 ほんとに面白さうだ。わたしも踊つて見たくなつ  
た。あの仲間へはひらうや。さあ〜もつとお吹  
き、もつとお吹き。

辨天さまも一しよになつて、踊りながら森の中へはひつてしま  
ふ。  
(逍遙選集九卷)

沼波瓊音  
名は武夫。俳人。  
元第一高等學校教  
授。名古屋市の人。  
昭和二年歿、年五  
十一。

一七 初 秋 日 記

沼 波 瓊 音

九月一日。子等皆久し振に學校に行く。兒童の通學を  
見るに至り市街蘇る。一高大學の學生の姿もちらほ  
ら見ゆ。圖書館にて、十時頃休憩室に入り、ふと空を見  
れば、片雲の間に残月なほあり。

二日。朝五時にしてなほやゝ暗し。東天のかの美しき  
雲を見よ。暈桃色したるが、昇らんとする日を逆さま  
に受けて、やうく〜に輝き來る。屋根の瓦、露にしとり、  
家を繞りて悉く蟲の音なり。櫻の葉は土用の中より  
黄ばみて落ち初むるものなるが、哀れに見え初むるは

この頃よりなり。溝の礫の上に散り布きて朝日受け  
たる、最も嬉し。圖書館に至れば、暫く見ざりし富士山、  
藍色の肩を露したり。日漸く高うしてまた見えぬ。



沼 波 瓊 音

今日風強し。木の葉頻りに  
落つ。館の避雷針の横に鳥  
二羽あり、風に向ひ、羽をそよ  
がせ、首を垂れて啼く。休憩  
室に入る。ソフの上に、壁に  
向ひて坐して眠る人あり。この人嘗てこのソフの上  
にてこちらに向き、洋服にて端坐し、手を拱き瞑目して  
寂然たりしことあり。面白き人なり。年四十四五、瘦

軀にして膚黄に、頭髮淋しく薄れ、面常に笑を帶ぶ。席には必ず唐本あり。この頃、日々館前の砂利の上に曝書をなす。紙の翻るを砂利もて鎮したり。風いよ／＼強し。公孫樹の並木皆聲あり。雀磔の如く飛ぶ。歸りて始めて今日の二百十日なるを知る。對馬の人別れを告げに来る。

明日遙かに郷里に歸り行かんとてなり。

新秋の山海三百里、羨しいかな。

花開かずなりしより垣際に遠ざけたる朝顔の盆栽、葉の黄ばみたる、そこゝに見えて淋し。

軒端の芙蓉、寶珠の如き緑の蕾は見えながら、未だ花瓣

を現すに至らず。

大粒の雨はらく／＼と芙蓉の葉を打つ。池暗く、金魚動かず。夕暮近く俄に西の空晴る。富士の見ゆるを子等珍しが。長女曰く、「あゝわかつた、富士山の上の平べつたいのは、上が天にはひつてるからだ。」少時にして、富士の彼方に雲簇りて金魚色に輝く。此方より見れば、この雲恰も山の縁を取りたるが如くなるが、漸くこなたおもてに匍ひ來るや、雲もて描きたる富士の如し。奇ならざるに似て甚だ奇なり。

忽然として厠の窓より夕陽射る。家も樹も皆暗き黄色に燻り、庭の梧桐の葉日に透きて、その色初冬の霜に

遇へるに異ならず。茶の間の向ふの障子また黄に照りて、そこなる電燈光なく晒されたり。つくつく法師忙しげに競ひ鳴く。

三日。雨激しく降る。冷やかなり。新しく貼りし障子そここゝに立てたり。部屋に物陰出来ていと懐かし。

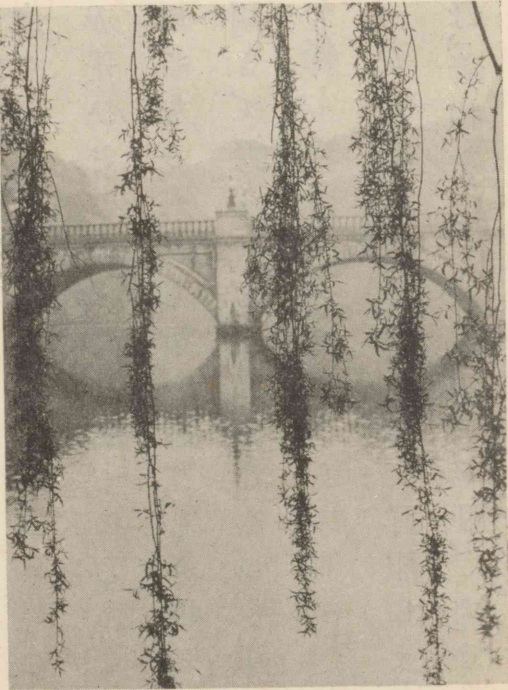
四日。障子しめきりてなほ寒し。華氏六十八度なり。

五日。すこし晴れかゝりたるが、頓に蒸暑く、障子また外す。暮方より雨車軸を流す。雨少し小止みになる毎に、つくつく法師鳴きに鳴く。そのいらくとせき立ちたる、志多くして齡傾きたる人に似て哀れなり。

六日。風稍強く、白き雲、水色の空をずり行く。三宅坂の

三宅坂  
東京市麴町區にある。

あたり用ありて行く。お濠端の柳、葉の重みに堪へ



御濠の柳

ず、散るを待てる風情あり。お濠に小波頻りに起りて、お濠に低く枝張れる松の陰に鶴の如き鳥見

ゆ。何鳥にや。(あらん) 昨日あたりより、いつも来る納豆屋来らず。今日その時刻に、男の聲にて不慣れに賣り来る。あの女の納豆



屋今病褥に在りて、夫代りて賣りに出でたるならん。皆々哀れがる。

七日。雨屢來りてしかも霽れず。夕暮近くなるまゝに愈々蒸暑し。

赤子ひとり茶の間の眞中にえんこして、頻りに右の手にて左の人さし指を握り、もぎ取る形しては、右の手を開きて見る。もぎ取りたるつもりにて、その指のなきを怪しむさまなり。

一女兒學校より歸り來て、洋服のまゝにて遊び居り。母、着物を脱ぎなさい」「洋服だけでいゝの、シャツはいゝの」「シャツも脱ぎなさい」「靴下はいゝの」「靴下も脱ぎ

百花園  
東京市向島區寺島  
町にある。

なさい」「靴下の紐はいゝの」「靴下の紐をほどこかないで、靴下が脱げるわけではない。紐だけ取らずにゐられるなら、さうして見るがいゝ。」兒皆脱ぎ棄て、紐を解きて靴下も取り、さて足に更に紐のみ結びて遊び續く。かくて夜床に入るにも、なほこの紐のみ取らであり。強情もかうなれば可笑し。

十一日。今日より圖書館始めて夜まであるなり。苦熱の間いかにこの九月十一日を待ちしよ。朝疾く友人來る。ともに百花園に赴く。いつもこゝへ來る秋口の道面白しと思ふ。なんとなく心の細やかになる頃なればなるらし。

雁來紅



紅蜀葵



葛



秋 叢 (筆 岳 華 藤 佐)

雁來紅・萩・紅蜀葵・芙蓉・葛花など、秋咲く花の悉く咲き競ひて、柔らかく慕はしき氣の庭に滿つるに、空こゝより見ればいと低う見えて、白き雲飛ぶも人を離れたるさまなし。蟲夜の如く鳴く。淺草に寄りて歸る。それより圖書館に行き、夕方にも歸らで引續き居り。館の電燈つきたる時の心持、我またこゝに所を得

たり。

十三日。始めて芙蓉の蕾に瓣の紅見ゆ。

十四日。芙蓉一輪開く。子等起き出で、歡呼して見る。

「今日一日きりで落ちるのだ」といへば、「つまらない」といふ。

十六日。午前三時頃覺めて戸を推す。天地たゞ蟲聲なり。幾十萬の蟲のさまざま變りたる節奏の聲、自ら相諧和して、急促なる曲を成し、我が身も家もその曲を踏んでずり出でんとす。深夜の蟲聲は美にあらずして莊重なり。

(凡人に聴け)

八波則吉  
第五高等學校教  
授。福岡縣の人。  
明治九年生。  
おめでたう。

縣廳  
石川縣廳。

一六 天杯御下賜

八波 則吉

天杯御下賜！ 母上様、おめでたう存じます。遙かに  
お祝ひ申し上げます。  
八十歳以上の長壽者に天杯御下賜の旨が、新聞紙上に  
傳へられるや、私は飛び立つやうに喜びました。さうし  
て取敢ず兄上に御祝状を差上げました。すると、兄上の  
返事に、「残念なことには、六箇月不足のためその數に洩れ  
られた。」とありました。私は非常に落膽しまして、縣廳  
に、どの縣下でも満八十歳以上か否かを尋ねに參る積り  
にきめてゐました。ところが、翌朝の新聞で、數へ年で宜

しい。調べ直せ。」との恩命があつた由の記事を見て、母  
上様、實に私は蘇生しました。

蘇生といへば思ひ出します。一昨年の夏、あなたが九  
死一生の場合、私はあなたの枕に取附いて、「おかあ様、あな  
たは私の力です！」と、無我夢中に叫びました。その聲が  
昏睡状態のあなたのお耳に響きまして、「この皺くちやの  
婆を、子なればこそ力にも思つてゐるのか。」と申され、そ  
れから、あなたは、「出来るなら助けて下さい。」と氏神様に  
祈願されて、奮發してお薬も飲まれ、お粥も啜すられ、さうし  
て漸く蘇生されたのだと、かうあなたから後日承つたの  
です。果して私がその刹那せつな、「おかあ様、あなたは私の力で

皺しわ 雜  
奮ふん 奪だつ

故郷有<sup>レ</sup>母云々  
藤原定家卿の愛  
吟

白樂天  
(白居易)

至尊  
天皇陛下のこと。  
こゝでは大正天皇  
をお指し申す。

す！と叫んだか否か、私の記憶には判然しません。しかし母上様、今でもあなたは私の力です。  
「故郷有<sup>レ</sup>母秋風涙。」これは實際です。「ふるさとに老いたる母の在<sup>イ</sup>すなりいたくな吹きそ秋の夕風。」これは赤子の至情です。たとひあなたの腰は曲り、視力は衰へ、歩行は自由でなくても、「我に母あり！」との誇が、如何に遊子の意を強くしてゐることをごいませう。況や八旬の高齢で尙且壯者をも凌ぐあなたの御健在！ 母上様、實にあなたは、私のためには千萬人力でおありあそばします！

母上様、年寄は即ち家の寶であります。で、至尊におか

今上陛下  
こゝでは大正天皇  
をお指し申す。

せられても、まづ老人を御愛撫遊ばされるのでございます。聞くところによれば、我が國は世界で名高い長命國ださうです。この度、天杯御下賜の光榮に浴する高齢者が、四十萬人にも及ぶさうです。「養老」の朱杯に「酒肴料」までお添へ遊ばされるとか承ります。四十萬人に天杯と御酒肴料、これだけでもたいした御費用かと存じます。これを思へば、子たるもの、孫たるもの、親を慰め祖父母に仕へないで何とませう。孝が即ち忠です。親に仕へるのは君に仕へる所以です。母上様、私ども同胞があなただに盡くすのは、畏れ多くも今上陛下の大御心に副ひ奉るのでございます。これを思つて、私は幾夜か感涙に枕

を濡らしました。畏くも陛下には、何縣何郡何村大字何字何といふ山里のあなたをば、非常に御鄭重に御愛撫あそばされます。然るに、私はこれまであなたにどれだけ盡くして居りましたらう。思へば慚愧に堪へない次第です。葉書一枚であなたのお心を安めることが出来た時にも、あゝこの不孝な私は、「いやな夢を見たが達者か。」と、あなたに問はれたことさへありました。母上様、始めて夢が覺めました。どうぞ達者であつて下さい。あなたは私の力です。さうして私もあなたの力となります。別封、その一部は氏神様への御神酒料です。その餘りはあなたのお友達に一獻差上げて下さい。氏

神様のお蔭です、御近所の方々のお蔭です。お友達と御近所の方々と、御一同で陛下の萬歳をお祈り下さい。私もあなたのお蔭、また氏神様のお蔭によつて、地方賜饌しせんの光榮に浴します。謹んで陛下の萬歳を祝します。

—御大禮前々日の深更—

(よくぞ男に)

一九 手紙の懐かしさ

前 田 晁

前田 晁  
文學者、山梨縣の  
人。明治十二年生。

をどる

手紙といふものほどあはれに懐かしいものはない。毎日郵便配達夫の來る時刻になると、窓に凭つてをどる胸を抑へながら、外面をじつと見てゐる人は澤山あるだ

らう。

獨りで淋しくてたまらずにゐるやうな時は勿論のこと、さうでない時でさへも、郵便！といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞ひ込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から來たのだらう。」「誰から來たのだらう。」かういふ考へが忽ち浮かんで來て、その郵便物を手にするまでの樂しさといつたらない。

いよく、それを手に取つて、封を切つて見る段になつて、最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても、親友の蔽ひ隠しのない胸を開いたやうな手紙である。暫く逢

はなかつた場合は勿論のこと、それほどでない時でさへも、心と心と相許した親友同士が、向ひ合つて心の中を語り合ふやうな手紙に接すると、俄に自分の胸も開けて來て、先刻までの淋しさなどは何時の間にか雲散霧消してしまふ。

遠く故郷を離れてゐる者にとつては、生家からの消息も亦懐かしいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、其の許には別段の障りもないか。こちら是一家打揃つて無事に暮してゐる。天候が定らぬので作物の出來榮ばえはどうかと思つてゐたが、先づこの分ならばこの先天氣さへ續いたら豊年だらうと思ふ。

其の邊には何の懸念もなく、其の許は専心に勉強するがよい。」かういふ手紙は大抵きまつた文句を並べることが多いものだが、それでも、それを書いた人が年老いた父親であるとか、優しい母親であるとか、または村の有力者として本當に忙しい長兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、様々なことが故郷といふ觀念と共に聯想されて來て、他人の手紙などに比すると、幾倍の興味があるか知れない。

ふだんならばうるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時によると、また久しく待たれたもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れてたゞ茫然とし

## 刺刺

てゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明らかに見やることが出來て、心の緊張を覚え、世間に處して行く上に於ける力と用意とを、更に新たにする様なことがある。一體人の頭は、時折何等かの刺戟を受けないと、どうかすると次第に腐つて行つて、終には因循になつたり姑息になつたりしたがるものである。

手紙を受取つた時のかういふ純な喜びを思ふと、私も亦、こちらからも胸を開いた眞情の流露したやうな手紙を書いてやつて、人にも同じ喜びを味ははせたいと思ふ。

(生きた文章の道)

國木田獨歩  
名は哲夫。小説家。  
千葉縣の人。明治  
四十一年歿。年三  
十八。

二〇 忘れ得ぬ人々

國木田獨歩



國木田獨歩

忘れ得ぬ人は必ずしも忘れて叶ふまじき人ではない。親と子とか、又は朋友・知己、その他自分の世話になつた教師、先輩などは、畢竟單に忘れ得ぬ人とだけはいへない、忘れて叶ふまじき人といはなければならぬ。然るに、こゝに恩愛の契もなければ、義理もない、ほんの赤の他人であつて、本來をいふと、忘れてしまつたところで、人情をも義理をも缺かぬもので、而も終に忘れて

しまふことの出来ない人がある。世間一般のものに必ずさういふ人があるとは言はないが、少くとも僕にはある。僕が十九歳の春の半ば頃と記憶してゐる。少し體の具合が悪いので、暫時保養する氣で、東京の學校を退いて國へ歸る其の途中のことであつた。大阪から例の瀬戸内海通ひの汽船に乗つて、波穩やかな春の内海を航したが、殆ど一昔も前のことであるから、僕も其の時の乗合の客がどんな人であつたやら、そんなことは少しも覚えてゐない。多分、僕に茶を注いでくれた客もあつたらうし、甲板の上で色々話をしかけた人もあつたらうが、今は



何も記憶に残つてゐない。何でも、其の時は健康が思はしくないから、あまり浮きくししないで、物思ひに沈んでゐたに相違ない。絶えず甲板の上に出て、將來の夢をゑがいては、此の世に於ける人の身の上の事などを思ひ續けてゐただけは、おぼろに記憶してゐる、勿論、若い者の癖で、それに不思議はないが。

春の日の長閑な光が、油のやうな海面に融け、殆ど漣も立てぬ中を、船首が心地よい音をさせつゝ、水を切つて進んで行く。それにつれて、霞たなびく島々を迎へては送り、迎へては送る右舷左舷の景色を、其の時僕は眺めてゐた。菜の花と麥の青葉とで錦を敷いたやうな島々が、宛

然霞の奥に浮いてゐるやうに見える。其のうち船が或小さな島を右舷に見て、其の磯から十町とは離れない沖を通るので、僕は欄に凭れて、何心なく其の島を眺めてゐた。山の根方のかしここゝに背の低い松が小杜を作つてゐるばかりで、見たところ畑もなく、家らしいものも見えない。寂として淋しい磯の退潮ひきしほの跡が日に輝いて、小さな波が水際を弄んでゐるらしく、長い線が白刃のやうに閃いては消える。無人島でないことは、其の島の山よりも高い空で、雲雀の鳴いてゐるのが微かに聞えるのでわかる。「田畑ある島と知れけり揚雲雀。」此の僕の老父の句を思ひ出して、山の彼方には、人家があるに相違ない

と僕は想像してゐた。

と見るうち、退潮の跡の日に閃いてゐる所に、一人の人がゐるのが目についた。確かに男である。さうして子供ではない。何か頻りに拾つては籠か桶かに入れてゐるらしい。二歩三步あるいてはしやがみ、そして何か拾つてゐる。自分は此の淋しい島陰の小さな磯を漁つてゐる人を、じつと眺めてゐた。船が進むにつれて、人影が黒い點のやうになつてしまつた。やがて磯も山も、島全體が霞の彼方に消えてしまつた。其の後けふが日まで殆ど十年の間、僕は何度この島陰の顔も知らない此の人を憶ひ起したらう。これが僕の忘れ得ぬ人々の一人である。

三津ヶ濱  
愛媛縣温泉郡にあ  
る。

松山  
松山市。

ある。

其の次は四國の三津ヶ濱に一泊して、汽船を待つた時のことである。夏の初と記憶してゐる。僕は朝早く旅宿を出たが、汽船の來るのは午後と聞いたので、此の港の海岸や町を散歩した。奥に松山を控へてゐるだけ、此の港の繁昌は格別で、別して朝は魚市が立つので、魚市場の近傍の雑沓は非常であつた。大空は名残なく晴れて、朝日が麗らかに輝き、光るものには反射を與へ、色あるものは光を添へて、雑沓の巷を賑々しくしてゐた。呼ぶ、叫ぶ、喚く。笑ひ聲、歡呼、嬉々としてこゝに起れば、咆哮、怒罵、亂れてかきこに涌くといふ有様で、賣る者、買ふ者、老若男女、

いづれも忙しさうに、慌しさうに、面白さうに、嬉しさうに、駈けたり追つたりしてゐる。露店が並んで、立食の客を待つてゐる。賣つてゐる品はいはずもがなで、食つてゐる人は大概船乗にきまつてゐる。鯛や比目魚や海鰻や章魚がそこらに投げ出してある。腥い臭が人々の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を撲つ。

僕は全くの旅人で、此の土地には何のゆかりもない身だから、知る顔もなければ、見覺の頭もない。そこで何となくこれらの光景が異様な感を起させて、世の中の有様を一段鮮やかに眺めるやうな心地がした。僕は殆ど自己を忘れて、此の雑沓の中をぶら／＼と歩き、稍、靜かな街

の一端に出た。すると、すぐ僕の耳に入つたのは琵琶の音であつた。

その店先に一人の琵琶法師が立つてゐた。歳の頃四十を五つ六つも越えたらしく、幅の廣い四角な顔で、丈の低い肥満した男であつた。其の顔の色、其の眼の光はちやうど悲しげな琵琶の音にふさはしく、あの咽ぶやうな絲の音につれて謠ふ聲が、沈んで濁つて淀んでゐた。巷の人々は一人も此の法師を顧みない。家々の者は誰も此の琵琶に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く。浮世は忙しい。

しかし、僕はじつと此の琵琶法師を眺めて、其の琵琶の

うらさいせの中

音に耳を傾けた。道幅の狭い、軒端の揃はない、且忙しきうな巷の光景が、琵琶法師と其の琵琶の音に調和しないやうで、しかも、どこにか奥深い調和があるやうに感じられた。あの嗚咽する琵琶の音が、巷の軒から軒へと漂うて、勇ましげな賣聲や、喧しい鐵砧かなしきの音と混つて、別に一道の清泉が濁波の間を潜つて流れるやうなのを聴いてみると、うれしさうな浮きくした、面白さうな、忙しさうな顔付をしてゐる巷の人々の心の底の絲が、自然の調を奏でてゐるやうに思はれた。僕の忘れ得ぬ人々の一人は、此の琵琶法師である。

(獨歩全集)

若山牧水

名は繁。宮崎縣の人。歌人。昭和三年歿、年四十三。

負うて

池袋

東京市豊島區にある。

武藏野線

池袋・飯能間の鐵道。

### 二 溪をおもふ

若山 牧水

溪のことを書かうとして心を澄ましてゐると、さまざまの記憶がさまざまの背景を負うて浮かんで来る。



若山牧水

秋のよく晴れた日であつた。

ほつかりした氣になつて、池袋停車場から出る武藏野線の汽車に乗つた。廣々した野原へ出て、思ふさまその日の日光を

身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、そこの野原を少し歩いてゐるうちに、野

飯能  
埼玉縣入間郡にあ  
る。



末に近く見えてゐる低い山の姿をみると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つて、その線路の終點驛飯能まで行つた。

着いた時はもう日暮で、引返さうとすると、非常にあわたぶしい氣持でその日の終列車に乗らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてもゐたので、あまり氣持のよくない乾き切つたやうな宿場町のそこに、たうとう泊つてしまつた。運悪くその宿屋にはおほぜいの下等な商人どもが泊りあはせてゐて、折角いゝ氣持で出かけて來た靜かな心をさんぐに荒されてしまつた。不愉快な氣持で、翌朝早く起きて飯の前を散歩に出た。漸

はづれ

名栗川附近



く人の起き出た町を、そのはづれまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

飯能といへば、野原のはての低い丘の陰にある宿場だとのみ考へてゐたので、そこに見事な溪が流れてゐようなどとは夢にも思はなかつたのである。少からず驚いた私は、あわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂、洗はれた巖、その間を澄みとほつた水が浅く深く流れてゐる。昨夜來の不快をも悉く忘れ果て、急いで宿屋へかへつて朝飯をしまふなり、私はまたすぐに引返して、すっかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。

溪をはさんだ紅葉も深く、諸所に植ゑこんだ大きな杉の林もあつた。

細長い筏を流す人たちに出會つた。

ゆるくと歩いて、その日は原市場で泊り、翌日は名栗まで。その翌日長い峠にかゝるとともに、その溪はいよいよ細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと、そこには又新たな溪が流れ出してゐた。

朝山の目を負ひたれば溪の音牙えこもりつつ

霧たちわたる

鶺鴒いしなき來てもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩

かげの淵に

おどろおどろとどろく音のなかにゐてまむか

ひにみる岩かげの瀧

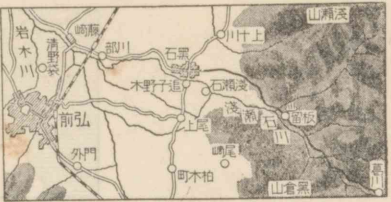
浅瀬石川といふのは、津輕の平野を越えて日本海の十三瀧に注ぐ岩木川の上流の一つである。そこきりで鱒の上るのが止るといふ荒い瀧のつゞく邊に、板留といふ小さな温泉場がある。

温泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二箇所と、その根がたの川原に接した所に一箇所と、一二丁づつの間隔を置いて湧いて居る。

私の好んで入つたのはその斷崖の根の温泉で、入口に

原市場  
埼玉縣入間郡にある。  
名栗  
同前。

浅瀬石川  
一名黒石川。青森縣南津輕郡。



津輕の平野  
青森縣の西部にあり。岩木川の流域。  
十三瀧  
津輕半島の西岸に彎入せる瀧。  
岩木川  
岩木山の西南麓に發し、十三瀧に注ぐ。



岩木が峯  
一名津輕富士。弘  
前の西北十二軒に  
ある。熄火山。高  
さ一五九〇米。

利根川  
源を群馬縣に發  
し、關東地方の中  
部を東に流れ、銚  
子に至つて太平洋  
に注ぐ。

むら山の峽かひより見ゆるしらゆきの岩木が峯に  
霞たなびく



根 利 奥

水上へくと急ぐころ、われ  
とわが寂しさを噛みしめるやう  
な心に引かれて、私はあの利根川  
のずつと上流、僅か一足で跳び渡  
ることの出来るやうに細まつた  
所までわけ上つたことがある。  
狭い兩岸には、もうほの白く雪が來てゐた。斷崖のか  
げの落葉を敷いて、ちよろくと流れてゆく、

その氷のやうに滑らかな水を見、まだらな新しい雪を眺  
めた時、何ともいへぬ心に、私は身じろぎすら出來なかつ  
たことを覺えてゐる。今思ひ出しても、神の前にひざま  
づくやうな有りがたい尊い心になる。

水のまぼろし、溪のおもかげ、それは實に私の心が正し  
くある時、靜かに澄んだ時、必ずのやうに心の底にあらは  
れて、私に孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる。

(靜かなる旅をきつと)



木宮泰彦  
歴史家。静岡高等  
學校教授。静岡縣  
の人。明治二十年  
生。

三 日章旗

木宮泰彦

凡そ國旗は國家の標識であるから、その國の歴史を語り、その國の國民精神の理想を示す物でなくてはならぬ。世界何れの國と雖も、國旗の制なき國はないが、我が日章旗の如く、鮮明にして純一、端正にして雄大なものはない。しかし、我が日章旗が國旗として制定せられるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても、思ひ出されるのは水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月、米艦四隻が浦賀に來つて交通を求むるや、我が國の上下は驚愕して爲すところを知らず、幕府は

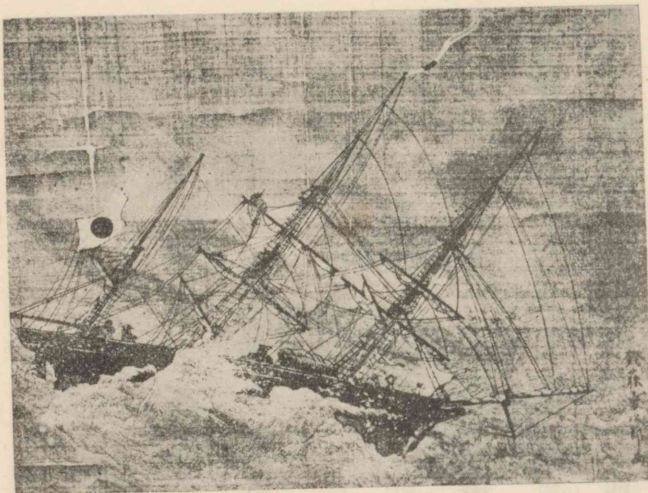
水戸烈公  
徳川齊昭。水戸の藩主。萬延元年（二五〇）歿、年五十一。  
浦賀  
今の神奈川県浦賀町。横濱市の東南約八軒にある。

水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月、幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船建造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造せられ、中には蒸汽船までも造るものがあつた。随つて我が國に於ても、外國船と紛れざらんために、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とはいはず、總船印と稱してゐた。そこで、幕府は有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目付、目付等は中黒を用ふべしと主張し、衆議が紛々として、何等決するところがなくして終つた。

翌安政元年五月、再び國旗制定の論が起り、大目付・目付等は、總船印には中黒を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黒は新田の中黒など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを大日本帝國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印となすは、大小輕重を顛倒したもので、その當を得ぬ、苟も國家を代表して、威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬと論じ、その旨を幕府に建議せられた。けれども、大目付・目付等は前議を固執して動かかなかつた。

然るに、烈公が七月一日再び建議案を奉り、中黒を以て

勝麟太郎  
後に安房と稱した。



咸臨丸(鈴木勇次郎筆)

國旗となす事の不可なるを論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日、我が國旗は光榮ある日章旗と定つたのである。

かくして、翌二年には薩藩で建造した船が日章旗を掲げて江戸灣に入港した。安政六年十一月、勝麟太郎は米國に渡航することを幕府から命ぜられて、咸臨丸に搭じ

新見正興  
 豊前守。安政六年  
 (一五)七月外國奉  
 行となり、同七年  
 正月村垣淡路守小  
 栗上野介を率ゐ、  
 米國に使用して國書  
 をワシントンに交  
 換した。

て浦賀を發航したが、その船こそは、日章旗を翻して外國  
 に渡つた最初のものであつた。翌七年に至つて、外國奉  
 行新見正興等は北米合衆國に使用し、條約の批准交換を行  
 つた。この時始めて堂々と日章旗を翻して彼の國に行  
 つたのであるが、彼の國人はその壯烈な意匠を見て、驚嘆  
 したといふことである。

國旗の制定はかくの如くであるが、その紋章の由つて  
 來つたところは、甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は  
 天照大神、又は大日靈貴おほひのたまと申し奉り、大神が一たび天の岩  
 戸に隠れさせ給へば、天地はために晦冥になつたといふ  
 のは、天日とその徳を等しくし給へる事を物語るもので

小野妹子  
 第三十三代推古天  
 皇に仕へ、同十五  
 年隋に使した。  
 隋  
 支那の朝名(西紀  
 五九一六七)。

ある。随つて天皇の御位を天つ日嗣と申し、皇太子を日  
 嗣の御子、日並皇子など申し奉つてゐる。聖徳太子が小  
 野妹子を隋に遣し給ふや、その國書に曰く、「日出づる處の  
 天子、書を日没する處の天子に致す。」と。又曰く、「東の天  
 皇敬みて西の皇帝に白す。」と。

げにや我が國はアジヤの東方に位し、日出づるところ  
 の國である。旭日の輝々たる光は熱烈活動の様を示し、  
 その眞紅の色は皓潔・至誠の情を示してゐる。我が日本  
 の標號とするに日章を措いて他に何があるであらう。

(面白い日本歴史の話)

山村暮鳥  
本名は土田八九  
十。詩人。大正十  
三年歿、年四十一。

二三 うつくしい日本

山村暮鳥

日本。うつくしい國だ。

葦の葉つばの朝露がぼたりと

おちてこぼれてひとしづく、

それがこの國となつたのだとでも

言ひたいやうな日本。

大海のうへに浮いてゐる

かはいらしい日本。

うつくしい日本。

小さな國だ。

小さいけれど、

その強さは鋼鐵はがねのやうな精神である。

おお日本。

びちびちしてゐる魚のやうな國。

勇敢な日本、

古い日本。

その霧深い中にとちこもつて、

山鳥の尾おしのながながしい夢を見てゐたのも、

今はもうむかしのことだ。

目をあけて、

そこにどんな世界をお前は見たか。

と  
ぢ。

物語

日本、日本。

お前のことをおもふと、

この胸が一ぱいになる。

お前は希望にかがやいてゐる。

お前は力にみちみちてゐる。

そして眞剣だ。

だが日本よ、

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい。

お前はよるひる絶えず

お前のまはりに打寄せてゐる

その波の音をなんときいてゐるか。

寂しくないか、  
おお孤獨な

遠い一つの星のやうな日本。

からりとはれた黎明の天空のやうな國。

ときどきは通り雲の

さつとかかるくらゐのことはあつても、

おまへはただの一度でも、

その顔面に泥をぬられたことがないんだ、

そんな美しい國なんだ。

日本。

幸福な日本。

強い日本。

わたしはここで生まれたんだ、

またここで最後の息をひきとつて、

遠つ祖とほみおやらと一緒にとほなるんだ。

墳墓の地だ。

静かな國日本、

小さな國日本、

つよくあれ、

すこやかであれ、

奢るな、

日本よ眞實であれ、

ばかにされるな。

二四 心に太陽を持って

山本有三

一唇に歌を持って

スコットランドの西岸、コースウォールポイントの沖合で  
ローワン號といふ小さな汽船が、十倍も大きさのある定  
期船と衝突して沈没しました。千九百二十年十月の、あ  
る月のない夜の出来事です。搭乗者總計百四人のうち  
乗組員十一人、船客十四人の行方がわからなくなりまし  
た。

アイリッシュ・ナショナル保險會社の監査役フランク・マッケ  
ンナも沈み行く船から放り出されて、黒い波の間を泳い

山本有三  
名は勇造。劇作家。  
小説家。栃木縣の  
人。明治二十年生。

スコットランド  
イギリスの一地  
方。大ブリテン島  
の北部。

でゐました。「救助船はいつたい何をしてゐるのだらう。」  
彼は氣が氣ではありませんでした。  
助けを求めて泣き叫ぶ聲も、いつか聞えなくなりました。  
た。すべてのものがごとく、波に吞まれてしまつたやうに、死の沈黙があたりにひろがりました。と、その氣味の悪い静けさの中から、突然——まつたく思ひがけなく、きれいな歌が流れて來ました。それは女の聲で、しかも調子も亂れてゐなければ、ふるへても居りません。まるで大勢の來客を前にして、客間で歌つてゐるとちつとも違はないやうな歌ひ方です。マッケンナはしばらくしんみりした氣持になつて聞きほれてゐました。彼は

今までに、どれだけ歌を聞いたかしれません。しかし、この時ぐらゐしみて、と歌の有難さを味はつたことはありません。何だかすうつといふ氣持になつて、彼は自分が水の中にひたつてゐることも忘れてしまつたほど、はればれとした氣持になりました。

教會の讚美歌だつて、とてもこんなに氣高くはありません。大聲樂家の獨唱だつて、とてもこんなに美しくはありません。寒さも、疲勞もどこかへ消し飛んでしまつて、彼はまつたくよみがへつたやうな氣持になりました。歌つてゐる人はどういふ人かわかりませんが、おそろくは、自分と同じやうに船から投げ出されたものでせう。

大抵の人は衝突の際にあわてふためいて、その爲にかへつて波に呑まれてしまつたのに、こんな危急の間にあつて、何といふ落着いた、また、何といふ朗らかな人だらう。自分なんか泳いでゐるだけがせい／＼なのに、こんな暗い夜に、こんな海の眞ん中でよくあんな美しい聲が出せるものだと思ひました。そして、自分もどうせ助からないものなら、かういふ美しい歌に送られて死んで行きたいものだと思ひました。彼は歌の聲をたよりに、その方に泳いで行きました。近づいて見ると、船が沈む拍子に流れ出たものでせう、一本の大きな丸太に、何人かの婦人がつかまつて立泳ぎをしてゐました。歌をうたつてゐ

るのは、そのうちの一人でした。まだ若い令嬢です。頭から大波をかぶつても彼女は平氣で歌をつゞけてゐました。救助船を待つ間、ほかの婦人たちが力を落さないやうに、寒さと失神の爲に、丸太から手を離さないやうに、かうして元氣をつけてゐたのです。

心に太陽を持って

唇に歌を持って。

このお嬢さんは、この歌を知つてゐたかどうか知りません。しかし、このお嬢さんぐらゐ、この歌の心を生かした人は少いでせう。このお嬢さんこそ、この歌を本當に



うたつた人といふべきです。

さて、お嬢さんの歌をたよりにマッケンナが泳いで行つたやうに、やがて一艘のボートが闇を縫つて助けに来てくれました。やはり、その美しい聲を手がかりにして：  
：さうして、マッケンナもその歌をうたつてゐたお嬢さんも、その外の婦人たちもみんな救ひあげられました。

この事實は、翌日の新聞に出たマッケンナの遭難談で明らかになつたのですが、惜しいことに歌をうたつたお嬢さんの名前がわかりません。しかし、名前はわからなくつても、このお嬢さんの歌つた美しい歌は、今もわれく

の耳に響いて来るではありませんか。演奏会でうたふ歌は大抵その場で消えてしまひますが、この歌ばかりはいつになつても消えないでせう。

### 二一 日本人

「なんだ。なんだ。」

「どうしたんだ。どうしたんだ。」

口々にさけびながら、バステューの廣場のはうへ人々が飛んで行きました。じりくくと日の照りつける廣い往來には、たちまち黒山の人だかりが出来てしまひました。

バステューの廣場  
パリの東部にあ  
る。

人垣の中には、荷物を山のやうに積んだ荷馬車が動か  
ずに突つ立つてゐました。しかし、みんなが駆けつけた  
のは、もちろん荷馬車がめづらしいからではありません、  
荷馬車をひいて来た馬が、お腹なかを見せたまゝ道ばたに倒  
れてしまつたからです。そのお腹には、脂汗がいつぱい  
にじんで黄色く光つてゐました。

馬は、暑さで疲れてゐるところへ、舗道に水がまいてあ  
つたために蹄を滑らして轉んだのです。

御者はいふまでもなくそこへ集つた人たちは、何とか  
して馬を立たせてやらうといろく骨を折りました。

馬も一所懸命に立ちあがらうともがきました。しかし、  
鐵の蹄がつるくくと舗道の表面をなぐめにこするばかりで、  
何としても立ちあがることは出来ませんでした。そのうちに、  
馬のお腹は次第にはげしく波をうちはじめました。

困りきつた御者は手のつけやうがないといふ顔で、馬  
の腹を見おろしながらため息をついてゐました。

その時顔の黄色い、あまり背の高くない一人の紳士が  
人垣の中からつかくと出て来ました。彼はいきなり  
自分の上衣をぬいで、それを馬の脚の下へ敷きました。  
それから、右手で鬣をつかみ、左手で馬の手綱を握りまし  
た。

「それッ！」

彼は身體に似合はぬ大きな掛け聲をかけました。それははつきりした日本語でした。

馬はぶると胴ぶるひして、一息に立ちあがりました。上衣で滑りがとめてあつたために、前脚に十分力がはひつたからです。

見物の中から思はず感嘆の聲がわきあがりました。

御者は非常によるこんで、幾度か、その黄色い顔の紳士にお禮をいひました。

だが紳士は「ノン、ノン。」と軽く答へながら、手早く上衣を拾ひあげました。そして、泥をはらつてそれを着ると、

ノン、ノン  
佛蘭西語で「えい、えい」の意味。

何かと話しかけたがる人々の間をわけて、どこかへ行つてしまひました。

この出来事はすぐパリの新聞に出ました。いや、それはフランスだけではありません。イギリスの新聞、イグニングスタンダードにまで掲載されました(千九百二十一年六月三十日の分)。そればかりではありません。イギリスで出版された逸話の本の中にも、「日本人と馬」といふ題でのせられてゐます。

この人の名前は今もつてわかりません。しかし、この人こそ日本人の中の日本人です。かういふ人がゐるこ

千九百二十一年  
皇紀二五八一年  
大正十年。

とによつて、ともすると誤解されやすい日本、日本人といふものがどれだけ正しく海外の人に理解されることか、その価値ははかり知れないものがあると思ひます。名前も職業もわかりませんが、かういふ人こそ、駐佛大使・駐英大使にも劣らない立派な私設大使です。

(少國民文庫「心に太陽を持って」)

### 二五 奥村五百子

堀内文次郎

日本の女性が組織した唯一の代表的婦人團體は愛國婦人會である。さうして、それに魂を吹き込んだのは、近衛篤磨公と第一回愛國婦人會會長岩倉久子夫人であり、それが大を成すに至らせたのは、閑院宮及び同妃兩殿下の直接間接の厚い御援助の



奥村五百子の銅像

力であつた事は言ふまでもないが、愛國婦人會をあれまでに隆盛にしたのは、其の主唱者奥村五百子女史が、斃れ

堀内文次郎

號は信水。長野縣の人。陸軍中將。文久元年(一八五三)生。

奥村五百子

佐賀縣の人。明治四十年歿。年六十三。

近衛篤磨

公爵。樞密顧問官。明治三十七年歿。年四十二。

岩倉久子

故宮内大臣岩倉具定の妻。

閑院宮殿下

御名は載仁親王。

同妃殿下

御名は智恵子。

て已む覺悟を以て奮闘努力した結果である。

奥村女史は女丈夫といはれてゐたほどあつて、多奇な性格の持主で、壯士のやうな風があつた。地方に出張しても、郡長と争つたり知事に喰つてかゝつたりなどして苦情を持込まれたことも度々あつた。併し、女史のかうした言行の底には涙が溢れてゐた、人の心を動かさずにはおかぬ人情が燃えてゐた。

明治三十四年頃、私は參謀本部に勤めてゐたが、或日、當時貴族院議長であつた近衛公から招かれたので、麴町十丁目にある公の官舎に行つた。同席した者は、小笠原子爵と故佐藤將軍と、さうして私とであつた。

小笠原子爵  
名は長生。佐賀縣  
の人。海軍中將。慶  
應三年(一八五七)生。  
佐藤將軍  
名は正。廣島縣の  
人。陸軍少將。大  
正九年歿。年七十  
二。

席が定ると、公は徐に口を開いて、

「奥村は今では随分有名になつたが、壯士仲間に入つて政治運動をしたり、兵隊に伍して偵察をしたりなど、頗る女らしくない事ばかりやつてゐる。あれでは到底歴史上に事功を貽すことが出來ない。所が、此の度支那に渡つて、彼の國の兵士等の暴狀を見て歸り、大いに悟る所があつたやうだ。さうして、『私たち日本の婦人は、軍隊のお蔭で安全に暮して居られるのであるから、其の報恩的義務として、私たち婦人の手で愛國婦人會を起して、國家の爲に盡くしたい。』といつて來た。此は至極結構な思ひ附きである。君方はどう思はれ

るか。」  
といつて、私共の考へを聞かれた。右の支那兵の暴状といふのは、明治三十三年の北清事變に於ける支那兵の暴状を指すのであつて、當時北支那の山河は修羅の巷と化してゐた。奥村女史は日本軍に従軍して、天津から北京へ入つたが、支那兵の掠奪殺害、言語に絶したあらゆる暴状を目撃して、實に涙なきを得なかつた。さうして、其の刹那、女史の胸中に一種の靈感が閃いた。——男子が兵役に服して國家を守護する其の報恩として、婦人の爲すべき眞の國家的事業は、自分たちの身の廻りの物を節約して、軍人の後援をするのにあると。

奥村女史の愛國婦人會設立の創唱は、實に此の動機によつて起つたのである。女史は熱情の人であつた。さうして、此の熱情の同情者であり、同時に其の事業の産婆役を勤めたのは、實に近衛公であつたのである。私どもは公の問に答へて、其の舉の頗る時宜に適してゐる事を述べて、賛成の意を表した。さうして、殺伐な心を和らげて世を平和に導くには、婦人の力に俟つ外はないと思つて、心から愛國婦人會の成立を祈つた。右の相談が一決すると、公は女史を官舎に招いて、一意専心同胞の爲に盡力し、一身を捧げて事に従ふ決心がつけば援助する旨を告げられたので、女史は他との一切の

關係を斷つて愛國婦人會の爲に極力奔走する旨を誓つた。それはいよく、愛國婦人會が創立されるやうになつた。

奥村女史が愛國婦人會の爲に盡くした辛勞は、眞に涙ぐましいものであつた。其の一例をいふと、明治三十五年四月十三日、愛國婦人會京都支部設立遊説の時、女史は激烈な胃腸病に罹つてゐて、二週間以上も食事をしなかつたほどであつたので、無論醫者は遊説の中止を勧めたのであつた。所が、私が會員の出發を見送る爲に新橋驛に行つて見ると、女史は藥を澤山携へて汽車に乗込んだ。併し、二十日近くも大患で難儀した體に激動を受けた爲

新橋驛  
東京市芝區・當時  
の東海道線起點車  
驛。

であらう、乗込むや否や、劇しい吐瀉を催した。私ども一同は女史に此の旅行を斷念するやうに勧めたが、女史はたゞ「有難う、く。」と繰り返し、さうして、「殊に最初の遊説に於て、自分の健康などにかゝはつてはゐられない。悪くなつたら、國家のため會のため旅先で死ぬばかりだ。」といつて、無理に出發した。其の時の有様は今もなほ眼前にあつて、悲壯な感じを起させる。

女史の後半生は此のやうな奮闘の歴史であつた。さうして、女史は近衛公の囑望に違はず、我が國に於ける婦人運動史の上に立派な足跡を貽したのであつた。

新制女子國語讀本 卷一終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

- |              |               |               |              |
|--------------|---------------|---------------|--------------|
| 【一】一丁七丈三上下不  | 【元】元兄充兆兒      | 卷即【厄】厄厘厚原厥    | 夏【夕】夕外多夜夢【大】 |
| 世丙並【中】中【丸】丸主 | 先光克免兒【入】入內    | 【去】去參【又】及友反叔  | 大天太夫央失奇奉奏契   |
| 【之】之久乏乘【乙】乙九 | 全兩【八】八公六共兵具   | 取受【口】口古句叫召可   | 奔奢輿奪獎奮【女】女奴  |
| 乞也乳亂【了】了事【二】 | 其典兼【册】册再【冗】冗  | 史右司各合吉同名后吏    | 好如妃妊妥妙妨妹妻姉   |
| 二五五井【亡】亡交京亭  | 【冬】冬冷涼准凌凍【凡】  | 吐向君吟否含呈吸吹告    | 始姑姓委姦姪姪姻姿威   |
| 亦【人】人仁仇今介仕他  | 凡【凶】凶出【刀】刀刃分  | 咸周味呼命和咽哀品員    | 娘娛娠娼婚婦婿媒嫁嫡   |
| 付代令以仰仲件任伊伏   | 切刊刑列初判別利到制    | 哲唐唯唱商問啓善喉喜    | 嫌孃【子】子字存孝季孤  |
| 伐休伯伴伺似位低住佐   | 刷券刺刻則削前剛副剩    | 喪喫單嗣嘉器噴嚴囑     | 孫學【宅】宅守安宏完宗  |
| 何余佛作伸使來佳例侍   | 割創劇劍劑【力】力功加   | 【囚】囚四回因困固國圍   | 官定宜客宣室宮害宴家   |
| 供依侮侯侵便係促俱俊   | 劣助努効勅勇勉動勸務    | 園圓圖團【土】土在地坂   | 容宿寄密富寒察寢實審   |
| 俗保俠信修俳俵倅併倉   | 勝勞募勢勤勸勵勸【包】   | 均坊坑坪垂型埋域域執    | 寫寬寶【寸】寸寺封射將  |
| 個倍倒候借倫假俸偏停   | 包【化】化北【區】區【千】 | 培基堀堂堅堤堪報場塔    | 專尉尊尋對導【小】小少  |
| 健側偶傍傑備催働傳償   | 十千升午半卓卓協南     | 塗塵境墓塀增墨墮壁壇    | 尙【尤】就【尸】尺尼尾尿 |
| 傷傾僅像僚僞僧價儀億   | 博【卜】占【印】印危却卯  | 壓壞壤【士】士壯壹壽【久】 | 局居屆屈屋展層履屬    |

常用漢字



【山】山岡岩岳岸峙峯島  
峽崇崎崩【川】川州巡集  
【工】工左巧巨差【己】己  
【巾】市布帆希帝帥師席  
帳帶常帽幅幕幣【干】干  
平年幸幹【幻】幻幼幾【广】广  
床序底店府度座庫庭庶  
康廉廓廢廣廳【延】延延  
建廻【升】弄弊【弋】式  
【弓】弓甲引弟弱張強彈  
【形】形彩彤影彰【役】役  
彼往征待律後徐徑徒得  
從御復徵微德徹【心】心  
必忌忍志忘忙忠快念怒  
思怠急性怨怪怯恐恥恨  
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡惰惱想愁愉  
意愚愛感慈態慕慘慢慎  
慣慨慮慰慶愁憂憐憚憲  
憶憾憤懣應懲懷懸戀  
【戈】成我戒戰戲戴【戶】戶  
戶戾房所扇【手】手才打  
扱扶批承技抑投抗折抱  
抵押披抽拂拍拒拓拔拘  
拙招拜括拈拏拾持指振捕  
捧描拾掃授掌排掛採探  
控推揚接提握握揮搗揮  
援損搖搜摛携摩撫擇擊  
操擔據擬擴攝【支】支  
【支】收改攻放政故敍教  
敏救敗敢散敬敵敷敷整  
【文】文【斗】斗料斜【斤】斤

斤斤斬新斷斯【方】方施  
旋族旗旗【无】既【日】日  
且旨早旬旭昇昌明易昔  
星春昭昨是映時晚晝普  
景晴晶智暇暖暗暑暮暴  
曆曇曜【日】曲更書曹會  
替最會【月】月有朋服朕  
朗望朝期【木】木末末本  
札朱机朽杉材村束柿杯  
東松板枕林枚果枝枯架  
柄某染柔查柅柱柳栗校  
株根格栽桃案桐桑梅條  
梨械棄棋棟森棗植楠  
業極榮構檉樂樓標樞樞模  
樣樹橋機橫檝檢櫻欄權  
【欠】欠欲款欺歌歎歌歎

【止】止正此步武歲歷歸  
【歹】死殊殉殖殘【段】段  
殺殿毀【母】母每毒【比】比  
比【毛】毛【氏】氏民【气】气  
氣【水】水水永汁求汗汚  
江池決汽沈沒沖沙汰河  
沸油治沼沿沉泉泊法波  
泣泥注泰泳洋洗津洪活  
派流浦浪浮浴海浸消涉  
液淑淚淡淨淫深混清淺  
添減淵渡溫測渴濁湖湧  
湯源準溢溶溺滅滋滑滯  
滴滿漁漂漆漏瀆漕濃漢  
漫漸潔潯湖澤激濁濃濕  
濟濱瀧灣【火】火灰災炊  
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熱熱燃燈燒營燼爐【爪】爪  
爪爭爲爵【父】父【爻】爾  
【片】片版牌【牙】牙【牛】牛  
牛牧物性特犧【犬】犬犯  
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴環  
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘  
甚【生】生產甥【用】用  
【田】田由甲申男町界畏  
畑畚畝略番畫異畱當壘  
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾  
病症痘痛痢療癖【火】登  
發【白】白百的皆皇【皮】皮  
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡  
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢  
知短【石】石砂砲破研硬  
硯碁碎碑確磁磨礎【示】示  
示社祈祕祖祝神稟祭禁  
禍福禦禮【禾】禾秀私秋科  
秒租秩移稅程稚種稱稻  
稿穀積穗稔【穴】穴究空  
突窃窳窗窳【立】立章童  
端競【竹】竹竿笑笛符第  
筆等筋筒答策算管箱節  
範築篤簡簿籍【米】米粉  
粒粘粗粹精糖糞【糸】系  
紀約紅紋納純紙級紛素  
紡索紫累細紳紹紺終組  
結絕絡給統絲絹經綠維  
網網綴綻綿緊緒線縞綠

編綬緯練縛縣縫縮縱總  
績繁織繕繪繭線繼續  
【色】缺【罔】罪置署罰罵  
罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽  
羽翁翌習翼【老】老考者  
【而】耐【黍】耕【耳】耳聖  
聞聯聲職聽【聿】聿肇  
【肉】肉肖肝股肥肩育肺  
胃背胎胞胸能脅脈脊  
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜  
膝臄臆膺臍【臣】臣臥臨  
【自】自臭【至】至致臺  
【目】與興舉舊【舌】舌舍  
【舫】舞【舟】舟航般舵舶  
船艦【良】良【色】色【艸】艸  
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊茵菓菜華  
萬落葉著萼蒙蒸蓄蔓薄  
藏藝藤藥【虺】虺虐處虛  
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲  
蠶蠻【血】血衆【行】行術  
街衝衡衡【衣】衣表袞袋  
袖被裁裂裏裕補裝裸製  
複褒襲【西】西要覆【見】見  
見規視親覺覽觀【角】角  
解觸【言】言訂計討訓託  
記訟訪設許訴診詐詔評  
詞詠試詩詰話詳誇誌認  
誓誕誘語誠誤說課調談  
請論諭諸諾謀謁諮講謝  
謠謹謬證識譜警譯議護  
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆









昭和十二年七月廿九日 印刷  
昭和十二年八月四日 發行  
昭和十三年一月十五日 修正再版印刷  
昭和十三年一月二十日 修正再版發行

不許複製

新制女子國語讀本(四年制用)  
定價 卷一—卷八 各金六十錢

新制女國文(四年制)

編者 安藤正次  
編者 東條操

發行者 株式會社三省堂  
代表者 龜井寅雄

印刷者 株式會社三省堂蒲田工場  
代表者 龜井豐治

發行所

(東京市神田區神保町一丁目一番地) 株式會社 三省堂  
(振替東京三三五五番地)  
(大阪市西區阿波座下通三丁目六番地) 株式會社 三省堂大阪支店  
(振替大阪八一三〇〇番地)

明治十三年一月二十日  
明治十三年一月二十五日  
明治十三年八月一日  
明治十三年八月十六日

費  
用  
冊

明治十三年一月二十日  
明治十三年一月二十五日  
明治十三年八月一日  
明治十三年八月十六日

三次高女一年生桐組

水戸百合子

